アルゼンチンの農産物流通とその市場

報告概要

No.

ARY

アルゼンチンの農産物流通とその市場

報　告　概　要

昭和57年1月

国際協力事業団
JICA LIBRARY
1053974[0]

国際協力事業団
受入
月日 '84 4.10
701
登録No. 03506
81.4
AFT

はしがき

アルゼンチンは豊かな農業国であるが，その中でも，ブエノス，アイレス市を中心とするパンパ地方はアルゼンチンの農業を代表する地域であり，東西南北1,500㎞に及ぶ世界有数な平野部で平坦にして広大な耕地が集中している。

この地方は年間の降雨量も適当であり，地味も肥沃で，牛の放牧と穀類の栽培及び草地に分割して，土地を利用する三圃式農法が定着している。

しかしながら，パンパ地方の外縁部の半乾燥地帯は，降雨量が少なく，地味も悪いので農業生産はそれほど豊かではない。

アルゼンチン政府は，パンパ地方外縁部のうち南部を流れる，コロラド川流域を開発するため，コロラド川流域開発公団（ＣＯＲＦＯ）を設立して開発を行なっており，その事業は着々と進められている。

アルゼンチン政府は，コロラド川流域開発計画の計画地域内の一部地区に日本人移住者を受入れることを前提として，日本の協力で開発を進めたい意向である。

日本が協力して，この地域を開発する場合，この地域で成立する営農形態や，その地域で生産される農産物の市場はどうなるのか，この国の流通機構がどのような仕組みであるかなど不明の点が多いので，これらの農産物流通とその市場について明らかにしておくことが，この地域を開発する場合の前提となる課題である。

そこで，国際協力事業団は，今回これらの要請に対応するため，社団法人食品需給研究センター 常務理事 多田　誠氏を昭和５６年８月１９日から３０日間アルゼンチン国に派遣し，同国の農産物流通とその市場の実態，並びに，開発地域の農産物流通を中心とした経済状況等を調査した。

本報告書は，この調査結果の概要をとりまとめたものである。この報告がこの地域の開発を進めるために参考となれば幸いである。

なお，本調査の推進に当って，ご協力いただいた外務省，農林水産省，在アルゼンチン日本大使館，ＣＯＲＦＯ等関係機関各位に対し深く謝意を表したい。

昭和５７年３月

国際協力事業団
農林水産計画調査部長
山崎　隆可

アルゼンチンの農産物流通とその市場

目　　次

第1　農業生産 …… 1
1. 国土と農耕地 …… 1
2. 規模別農場数 …… 2
3. アルゼンチンの農産物 …… 3
（穀類作物） …… 5
（油料作物） …… 13
（原料作物） …… 16
（嗜好作物） …… 19
（野菜作物） …… 21
（果実作物） …… 25
4. 家畜牧養頭数 …… 28
第2　農産物の流通 …… 31
1. 農産物の一般的流通構造 …… 31
2. 穀物の流通構造 …… 32
3. 食肉の流通構造 …… 34
4. 青果物の流通構造 …… 35
第3　農産物市場 …… 41
（海外市場） …… 41
1. 貿易の構造 …… 41
2. 穀物の輸出 …… 43
3. 綿とマテ茶 …… 49
4. 野菜と果実の輸出 …… 50
5. 食肉の輸出 …… 51
（国内市場） …… 54
1. アルゼンチンの消費人口 …… 54
2. 穀類等の国内消費と価格 …… 57
3. 青果物の国内市場 …… 65
4. 肉類の国内市場 …… 69

第4　CORFOで生産される農産物の販売 …… 71
1. 何が栽培されるか …… 71
2. コスト競争に勝たねばならぬ …… 71
3. 新規野菜の導入が必要である …… 71
4. CORFOにおける作物の選定と販売 …… 72
5. 問　題　点 …… 73

アルゼンチンの農産物流通とその市場

第1　農業生産

1. 国土と農耕地

アルゼンチンの国土は279万平方キロメートルといわれており，そのうち耕地が30万平方キロメートルといわれているので，耕地利用率は，10.75%である。

農牧省の資料による土地利用状況によると農牧業利用地は，1億9,000万ヘクタールで，そのうち耕作地，2,000万ヘクタール，牧場，1億4,800万ヘクタールとなっており，人工草地が1,600万ヘクタールで残りの1億3,200万ヘクタールが自然草地であるが，農牧省の推定では農牧業用地としての利用可能地を，2億2,000万ヘクタールと見積っており，そのうち耕作地を6,400万ヘクタールと推定している。

現在の耕作地が，国土の7.2%であるが，耕作可能地は国土の22.9%であるとみられており，耕地を3.2倍まで拡張できると考えているようである。この耕作可能地は世界の穀倉として多大な可能性を包蔵しているものといえるであろう。

日本の農耕地を500万ヘクタールとみると凡そ12.8倍にあたる。

土地利用と今後の可能性

（単位100万ヘクタール）

	現在		今後の可能性		
	面積	構成比(%)	面積	増減	構成比(%)
1. 農牧用地	190	68.1	220	30	78.9
① 耕作地	20	7.2	64	44	22.9
② 牧場	148	53.0	109	△ 39	39.1
人工草地	16	5.7	68	52	24.4
自然草地	132	47.3	41	△ 91	14.7
③ 森・林	22	7.9	47	25	16.9
2. 非農牧用地	89	31.9	59	△ 31	21.1
計	279	100.0	279	—	100.0

2. 規模別農場数

この国の農業は５０万9,817農場に分けられて経営されている。この農場数が凡そ農家にあたるので，農家数（所有者数）と考えて農場の規模別に区分してみると，２５ヘクタール未満の農家が２１万1,088戸であって，41.4％を占めており，１００ヘクタール未満で計算すると３４万3,034戸で，67.3％を占めている，１００～４００ヘクタールの農家は１０万1,940戸で，２０％を占めている，４００～1,000ヘクタールの農家は３万2,349戸で6.3％である。。1,000ヘクタール以上を経営する農家数は３万2,494戸であって，僅かに6.4％である。この国の農民層を，１００ヘクタール未満を下層農，１００～1,000ヘクタールを中農層，1,000ヘクタール以上を富農層と考えると，下層農67.3％，中層農26.3％，富農層6.4％に区分できる。

これらの３階層に区分された農家の経営地（所有地）は下層農が９６０万ヘクタールで4.7％であり，中農層が4,154万ヘクタールで，20.5％にあたり，富農層の農場占有面積は１億5,221万ヘクタールであり，実に74.8％を占める。

この階層別農場数とその占有面積を平均１戸当たりに計算すると，下層農は2.8ヘクタール，中農層309.3ヘクタール，富農層は4,684.2ヘクタールとなる。したがって，63.3％を占める下層農には１戸当2.8ヘクタール，26.3％を占める中農層は３０９ヘクタール，6.4％の富農層には4,684ヘクタールが配分されている。しかも，5,000ヘクタール以上を経営する農家は僅かに6,678戸で，戸数1.3％に過ぎないが，その保有地は全国の農用地の46.7％に及び9,497万ヘクタールを占有し，１戸当たり実に１万4,221ヘクタールの土地を所有する計算になる。この所有形態がとりもなおさず，アルゼンチンの農業構造であり，この国の生産経済の仕組みでもある。

アルゼンチンの農場の規模別農場数とその面積

区分	農牧場数		面積（1,000ha）	
	数	構成比（％）	面積	階層別占有率（％）
２５ｈａ未満	211,088	41.4	1,821	0.9
25～100	131,946	25.9	7,780	3.8
100～400	101,940	20.0	21,068	10.4
400～1,000	32,349	6.3	20,468	10.1
1,000～5,000	25,816	5.1	57,239	28.1
5,000以上	6,678	1.3	94,969	46.7
計	509,817	100.0	203,345	100.0

資料：農牧省統計表

3. アルゼンチンの農産物

アルゼンチンの農業は中南米の土地所有形態といわれている富農と貧農の格差の中でもひときわ目立つ特異な偏在形態であるが，これらの農民層においてどの階層がいかなる作目を採用しているのか，農場規模と経営構造の関係は詳かでないが，この国の主たる農業地帯を形成するパンパ地方の農業は穀物生産と肉用牛生産の牧場とが一体化した経営形態が多く，単一商品生産の農業はきわめて少ないようである。

この国の全体の農業生産をみると，穀類作物では小麦，大麦，ライ麦，からす麦などの麦類と，とうもろこし，ソルゴー，コウリャンなどのきび類が中心作物である。

油料作物では大豆，落花生，ヒマワリ，亜麻などが栽培されている。原料作物としては，ブドウ，砂糖キビ，綿が生産されており，たばこ，マテ茶などの嗜好作物もある。野菜作物では，ポロット豆，レンズ豆，えんどうなどの豆類のほか，トマト，じゃがいも，たまねぎ，マンジョカ，にんにくなどが主として生産されている。果実作物では，りんご，梨，桃，オレンジ，マンダリン，レモン，グレープフルーツ，バナナなどが生産されている。

この国が亜熱帯から寒帯に及ぶ広い気候区にわたって位置することから，各種の作物が生産される可能性があるが，この国の人口が2,786万人で，国土に比較して消費人口がきわめて少ないことから輸出指向の農業生産となり，国内消費を指向する作物にはその生産にも自ら限界がある。

7　農業生産の概要

作物	作付面積（1,000ha）			生産数量（1,000トン）		
	1978	79	80	1978	79	90
（穀類作物）						
小麦	4,600	5,230	5,000	5,300	8,100	8,100
大麦	890	761	592	353	554	339
ライ麦	2,140	1,722	1,494	170	210	202
からす麦	1,480	1,545	1,680	570	676	522
とうもろこし	3,100	3,300	3,310	9,700	8,700	6,400
ソルゴー	2,650	2,530	1,880	7,200	6,200	2,960
コウリャン	300	343	278	320	310	188
米	96	100	116	320	310	312
アルピステ	75	60	56	60	51	44
小計	15,331	15,591	14,406	23,993	25,111	19,065

次ページへ

作物	作付面積 (1,000ha)			生産数量 (1,000トン)		
	1978	79	80	1978	79	80
(油料作物)						
大豆	1,200	1,640	2,100	2500	3,700	3,500
落花生	452	400	287	260	470	206
ヒマワリ	2,200	1,766	2,000	1,600	1,430	1,650
亜麻	950	893	1,070	810	600	743
油桐	52	52	52	82	58	81
小計	4,854	4,751	5,509	5,252	6,258	6,180
オリーブ	—	—	—	75	95	112
(原料作物)						
ブドウ	343	342	342	2800	3,500	3,000
砂糖キビ	356	351	337	13,600	14,120	15,000
綿	621	702	571	220	174	160
その他	4	6	25	59	48	52
小計	1,324	1,401	1,275	16,679	17,842	18,212
(嗜好作物)						
たばこ	70	78	65	63	70	62
マテ茶	43	41	41	103	125	153
小計	113	119	106	166	195	215
(野菜作物)						
ポロット豆	190	236	219	170	232	178
レンズ豆	82	46	32	40	12	17
えんどう(乾)	49	21	21	46	12	19
〃 (青)	18	17	14	34	35	49
トマト	33	31	31	574	552	546
じゃがいも	116	110	114	1,614	1,585	1,600
たまねぎ	16	17	18	263	270	278
マンジョカ	22	22	22	182	183	184
にんにく	17	18	19	79	81	95
小計	543	518	490	3,002	2962	2,966
(果実作物)						
りんご				810	972	958
梨				150	160	165
桃				250	282	238

次ページへ

作物	作付面積（1,000ha）			生産数量（1,000トン）		
	1978	79	80	1978	79	80
（果実作物）						
オレンジ				670	685	700
マンダリン				255	219	296
レモン				380	267	394
グレープフルーツ				145	135	153
バナナ				129	144	140
小計				2,789	2,864	3,044

（家畜の頭数と生産）	飼養頭数（1977年）	と殺頭数（1979年）	羊毛
肉牛	6,105万頭	1,562万頭	－
めん羊及び山羊	3,522	786	1万5,000トン
豚	355	283	－
馬	307	28	－

（畜産物）	搾乳頭数	牛乳生産	
乳牛	268万頭	520万kℓ	

（注） 鶏肉と鶏卵の生産は不明。

資料： 農牧省統計表

（穀類作物）

(1) 小麦の産地

この国の小麦生産は1980年に810万トンであったが，1939年には1,032万トンの実績がある。現在はその生産が少なくなっている，1978年の世界的産地をみると世界11位であるが，輸出余力が大きく。輸出国では世界5位で480万トンを輸出し世界の総輸出量の5.8%を占めている。

小麦の産地はブエノス・アイレス州が圧倒的に多く，460万トンで，全国の56.8%を占めている。これに次いで，サンタ・フェ州の170万トン，コルドバ州の120万トン，ラパンパ州の43万トンであるこの4つの州で793万トンが生産され全国生産量の97.9%を占めており，その他の州の生産量は僅かに17万トンで2.1%に過ぎない。

小麦の主要産地別生産実績

州別	収穫面積(1,000ha)		生産数量(1,000トン)		占有率(%)
	1979	1980	1979	1980	(1980)
ブエノス・アイレス	2,871	2,880	4,741	4,600	56.8
サンタ・フェ	760	800	1,350	1,700	21.0
コルトバ	730	761	970	1,200	14.8
ラ・パンパ	480	341	515	430	5.3
エントレ，リグス	115	84	79	70	0.9
サンチャゴ・デ・エステロ	12	34	50	43	0.5
リオ・ネグロ	14	14	16	14	0.2
その他の州	79	86	20	43	0.5
計	5,061	5,000	7,741	8,100	100.0

資料：農牧省統計表，以下国内統計はすべて農牧省統計から引用した。

世界の小麦生産数量　（1,000トン）

国名	1977	1978	1979
1 ソ連	92,165	120,824	90,100
2 アメリカ	55,420	48,922	58,285
3 中国	45,001	51,002	56,003
4 インド	29,010	31,749	34,982
5 フランス	17,350	20,970	19,393
6 カナダ	19,862	21,146	17,746
7 トルコ	16,720	16,765	16,560
8 オーストラリヤ	9,370	18,083	15,500
9 イタリヤ	6,347	9,332	9,142
10 西ドイツ	7,235	8,118	7,971
11 アルゼンチン	5,300	8,100	7,400
12 イギリス	5,274	5,610	7,140
13 チェッコスロバキア	5,214	5,606	4,700
14 ブラジル	2,066	2,677	2,700
ー その他	74,436	79,936	72,594
計	390,770	448,840	420,216

資料：FAOの統計による。

(2) ビール用大麦の産地とホップ産地

この国のビール麦の生産は1980年には28万6,000トンで，前年の79年の47万トンに比べ60.8%に減少している。播種面積は年々減少しているが，単収は向上しており，面積の割には減少していない。

ビール用大麦の産地は，ブエノスアイレス州が23万トンで最も多く全国生産量の79.4%を占めており，コルトバ州，ラ・パンパ州でも生産されるが，その生産は僅かである。

ビール用大麦の生産

年次	播種面積 (1,000ha)	収穫面積 (1,000ha)	1ヘクタール当たり収量 (kg)	生産数量 (1,000トン)
1975年	419	303	1,205	365
76	440	371	1,208	448
77	470	412	1,626	670
78	430	250	1,160	290
79	330	288	1,632	470
80	220	198	1,444	286
最近6カ年平均	385	304	1,379	422

ビール用大麦の州別生産状況

州別	播種面積 (1,000ha)				生産数量 (1,000トン)			
	1978	79	80	3カ年平均	1978	79	80	3カ年平均
ブエノスアイレス	313	250	162	242	232	406	227	288
コルトバ	57	33	26	39	25	15	27	22
ラ・パンパ	48	36	23	36	24	40	25	30
サンタフェ	8	6	5	6	5	5	4	5
その他	4	5	6	4	4	4	3	4
計	430	330	222	327	290	470	286	349

ビール用大麦は凡そ，5万8,000トンが輸出されるが，その他は国内醸造に向けられる。そのため，原料として，ホップを生産することが必要であるが，その産地はクージョ地方のネウケン州である。しかし，その植付面積は，きわめて少なく，300ヘクタールで，21トンの生産に過ぎない。ネウケン州以外では，きわめて少なく12トンの生産があるだけである。

ホップの生産

年次	植付面積 ヘクタール	1ヘクタール当たり収量 (kg)	生産数量 トン
1978年	320	781	250
79	320	780	227
80	295	709	170
	生産地はネウケン州（1979年）		
ネウケン	296	726	215
その他	24	—	12
計	320	709	227

(3) からす麦とライ麦の産地

この国で生産される，からす麦は，1980年に52万トンであった。この生産量は前年の68万トンに比べ77%に減っている。からす麦の播種面積は僅かながら年々増加しているが，収穫される面積が減少したためである。生産地はブエノス・アイレス州で41万トンを産するので，78%を占めており，これに次いで，ラ・パンパ州，5万トン，サンタ・フェ州の3万トン，コルトバ州の2万トンなどである。

ライ麦の生産は1980年に20万トンであり播種面積は年々減少傾向にみえる。

主な産地は，ブエノス・アイレス州で12万トン，ラ・パンパ州で4万トン，コルトバ州で3万トンなどである。

からす麦の生産状況

年次	播種面積 (1,000ha)	収穫面積 (1,000ha)	1ヘクタール当たり収量 (kg)	生産数量 1,000トン
1975年	1,201	282	1,160	327
76	1,342	338	1,281	433
77	1,471	383	1,284	530
78	1,480	430	1,326	570
79	1,545	500	1,352	676
80	1,680	410	1,273	522

からす麦の州別生産数量（１９８０年）

州別	播種面積（1,000ha）	収穫面積（1,000ha）	1ヘクタール当たり収量(kg)	生産数量（1,000トン）
ブエノスアイレス	867	280	1,451	407
ラ・パンパ	224	52	958	50
サンタ・フェ	278	31	977	30
コルドバ	150	29	793	23
その他	161	18	－	12
計	1,680	410	1,273	522

ライ麦の生産状況

年次	播種面積（1,000ha）	収穫面積（1,000ha）	1ヘクタール当たり収量(kg)	生産数量（1,000トン）
１９７５年	2,370	375	816	306
７６	2,408	300	910	273
７７	2,300	340	971	330
７８	2,110	240	708	170
７９	1,722	260	808	210
８０	1,494	225	898	202

（注） 播種面積のうち８０％は乾燥地帯で牧草として飼料化されている。

ライ麦の州別生産状況（１９８０年）

州別	播種面積（1,000ha）	収穫面積（1,000ha）	1ヘクタール当たり収量(kg)	生産数量（1,000トン）
ブエノスアイレス	484	115	1,017	117
ラ・パンパ	402	57	619	35
コルドバ	374	35	939	33
サンタ・フェ	133	9	1,022	9
その他	101	9	－	8
計	1,494	225	898	202

(4) とうもろこしとソルゴーの産地

とうもろこしの生産量は640万トンであるが，1935年には，1,148万トンの生産実績があるので，現在の生産量は最盛期に比べて55.7%に落ち込んでいる。

とうもろこしの産地は最も多いのが，ブエノス・アイレス州で，1980年には252万トンに減っているが，最近3カ年平均でみると，43.9%を占めている。これに次いでサンタ・フェ州152万トン，コルトバ州の122万トン，でこの3州で，526万トンでこの3カ年平均でみた全国生産に占める割合は，87.5%であり，その他の各州の生産量は，114万トンであり，12.5%に過ぎない。

ソルゴーの全国生産量は，296万トンで1978年の720万トンに比べ41%に激減している。ソルゴーの産地は広く，最も多く生産されるところは，サンタ・フェ州の80万トンで，これに次いでコルトバ州78万トン，ブエノス・アイレス州の44万トン，チャコ州の40万トン，ラ・パンパ州の22万トン，フォルモサ州，エントレ，リオス州，サンチャゴ，デル・エステロ州のそれぞれ約10万トンとなっており，その他の州を合計しても4万トンに満たない生産量である。

ソルゴーは年次により多大な変化があり，作付面積の変化も大きいが豊凶の作柄に大差がある，例へばコルトバ州の1978年の生産は270万トンであったが，3年目に28.7%に激減しているし，ブエノスアイレス州でも1978年には200万トンを生産したが，1980年には44万トンと21.9%にまで減少している。

とうもろこしの年次別生産の推移

年次	播種面積 (1,000ha)	収穫面積 (1,000ha)	1ヘクタール当収量 (kg)	生産数量 (1,000トン)
1974-75年	3,871	3,070	2,508	7,700
76	3,696	2,766	2,117	5,855
77	2,980	2,532	3,278	8,300
78	3,100	2,660	3,647	9,700
79	3,300	2,800	3,107	8,700
80	3,310	2,490	2,570	6,399
(最近6カ年平均)	3,376	2,720	2,859	7,776

とうもろこしの主要産地

州別	収穫面積（1,000ha）				生産数量（1,000トン）				3カ年平均の100分化
	1978	79	80	3カ年平均	1978	79	80	3カ年平均	
ブエノス・アイレス	1,334	1,330	1,240	1,301	4,700	3,670	2,520	3,630	43.9
コルドバ	560	700	700	653	1,880	1,918	1,220	1,673	20.2
サンタ・フェ	470	519	460	483	2,200	2,100	1,515	1,938	23.4
ラ・パンパ	230	220	300	250	226	310	221	252	3.1
サン・メレイス	137	149	211	166	160	276	256	231	2.8
エントレ・カオス	136	148	135	140	221	126	104	150	1.8
サ・エステーロ	78	77	69	75	110	98	115	108	1.3
その他	155	157	195	169	203	202	449	285	3.5
計	3,100	3,300	3,310	3,237	9,700	8,700	6,400	8,267	100.0

ソルゴーの生産数量

年次	播種面積（1,000ha）	収穫面積（1,000ha）	1ヘクタール当たり収量（kg）	生産数量（1,000トン）
1975年	2,602	1,938	2,492	4,830
76	2,358	1,834	2,759	5,060
77	2,780	2,377	2,777	6,600
78	2,650	2,254	3,194	7,200
79	2,530	2,044	3,033	6,200
80	1,884	1,279	2,314	2,960
最近6カ年平均	2,467	1,954	2,802	5,475

ソルゴー主要産地（州）

州別	播種面積（1,000ha）				生産数量			
	1978	79	80	3カ年平均	1978	79	80	3カ年平均
コルドバ	810	811	566	729	2,700	2,591	777	2,023
ブエノス・アイレス	670	586	365	540	2,000	1,300	437	1,246
サンタ・フェ	534	480	394	469	1,225	1,058	796	1,026
チャコ	117	152	150	140	233	219	396	283
ラ・パンパ	204	246	188	213	400	600	216	405
フォルモ・サ	37	37	41	38	70	52	109	77
エントレ・リオス	180	102	80	121	404	151	95	217
サンティアゴ・デル・エステロ	49	50	56	52	85	86	97	89
その他	49	66	44	53	83	143	37	87
計	2,650	2,530	1,884	2,355	7,200	6,200	2,960	5,453

(5) コウリャンの産地

コウリャンの生産は1980年に19万トンになっており，1977年の33万トンに比べて57%に減少している。その主産地はコルトバ牝が12万トンで，これに次いで，サンタ・フェ州3万トン，ブエノス・アイレス州2万トン，ラ・パンパ1.6万トンなどである。

コウリャンの生産数量

年次	播種面積 (1,000ha)	収穫面積 (1,000ha)	1ヘクタール当り収量 (kg)	生産数量 (1,000トン)	内輸出数量
1975年	278	104	1,029	200	94
76	319	230	1,274	294	124
77	350	255	1,333	340	172
78	340	244	1,353	330	195
79	345	238	1,303	310	139
80	278	182	1,032	188	－

コウリャンの州別生産（1980年）

州別	播種面積 (1,000ha)	収穫面積 (1,000ha)	1ヘクタール当り収量 (kg)	生産数量 (1,000ha)
コルドバ	143	119	1,025	122
サンタ・フェ	40	31	987	30
ブエノス・アイレス	51	15	1,273	19
ラ・パンパ	44	17	943	16
その他	1	－	－	1
計	279	182	1,033	188

(6) 米の産地

この国でも米が生産されている。主産地はコリエンテス州の11万トン，エントル，リオス州の10万トンと，サンタ・フェ州25万トンなどである。しかし全国で32万トンで現在の生産はきわめて少量であるが，1977年には19万トンの輸出があり，79年にはその数量が4万トンに減少している。

しかし，米が生産された場合その大部分を輸出に向けられるということはきわめて重要な意味をもっている。

米の生産数量（１９８０年）

州別	播種面積（1,000ha）	収穫面積（1,000ha）	1ヘクタール当り収量（kg）	生産数量（1,000トン）
コリエンテス	37	37	2,951	109
エントレ・リオス	31	27	3,862	104
サンタ・フェ	9	9	2,816	25
その他	19	16	－	18
計	96	89	2,876	256

年次	米の輸出数量	１トン当価格
１９７７年	193（1,000トン）	337 ドル
8	119	330
9	38	387

（油 料 作 物）

(1) 大豆と落花生の産地

この国の大豆の生産は３５０万トンであるが，その生産は，アメリカ，中国，ブラジルに次いで，第４位である，その輸出数量がアメリカに次いで世界第２位である。

大豆の主な生産地は，サンタ・フェ州が１７２万トンで，４９.２％を占めており，ブエノス・アイレス州が８８万トンで，２５.２％，コルトバ州４５万トン，１２.９％，ツクマン州１３.４万トンで，３.８％などである。１９８０年の１ヘクタール当たり収量は，1,724kg であるが，１９７９年は豊作であって，全国平均で，2,313kg，サンタ・フェの単収は2,519kgであったといわれている。

大豆生産におけるアルゼンチンの地位は，FAO の統計によるとアメリカ，中国，ブラジルに次いで第４位であるが，輸出はアメリカに次いで，第２位である。しかしアメリカの2,313万トンに比べると，僅か２４０万トンであり，その１０％に過ぎない。

この国の落花生の生産は，１９７９年には４７万トンであった。ところが，８０年には２１万トンに激減している。その理由はよくわからない。主産地はコルトバ州であって，州別の統計では６５万4,000トンである。これに次ぐサルタ州の生産は9,000トンできわめて少ない数量に過ぎない。（㊟ 落花生の生産統計は全国統計と州別表示の統計は不一致で大きな

誤差がある。）

アルゼンチンでは大豆は豆の形態で輸出されるものが７２７％で輸出割合は世界最高であるが，このほか，大豆油の形態で輸出されるものが，８万トンに及んでいる。

落花生の豆としての輸出は８３万トンであるといわれているが，落花生油の形態での輸出が，１２７万トンもあるので，加工輸出が多くなっているようである。

大　豆　の　生　産

年次と州別	収穫面積（1,000ha）	1ヘクタール当収量（kg）	生産数量（1,000トン）		
１９７５年	354	1,363	485		
７６	434	1,603	695		
７７	660	2,121	1,400		
７８	1,150	2,174	2,500		
７９	1,600	2,323	3,700		（参考）
８０	2,030	1,724	3,500	（割合）	1979年1ヘクタール当たり収量
（主産地州別）	（１９８０年）				
サンタ・フェ	1,000	1,720	1,720	49.2	（2,529）
ブエノス・アイレス	470	1,879	883	25.2	（2,000）
コルトバ	343	1,312	450	12.9	（2,523）
ツクマン	85	1,576	134	3.8	（1,987）
その他	132	－	313	8.9	－
計	2,030	1,724	3,500	100.0	（2,313）

落　花　生　の　生　産

年次と州別	収穫面積（1,000ha）	1ヘクタール当り収量（kg）	生産数量（1,000トン）	（参考）内落花生油の生産（1,000トン）
１９７５年	357	1,052	263	56
７６	308	1,094	237	60
７７	367	1,635	420	113
７８	428	607	260	71
７９	393	1,198	470	99
８０	279	738	206	－
（主産地はコルトバ州）（１９７９年）				
コルトバ	390	1,677	654	－
サルタ	5	1,800	9	－
その他	5	800	4	－
計	400	1,668	667	－

(2) ヒマワリと亜麻の産地

アルゼンチンでは，油料作物として，ヒマワリが広く生産されている。1980年の収穫面積は185万5,000ヘクタールであり，その生産数量は，165万トンである。

主産地は，最も多いのが，ブエノス・アイレス州の，100万ヘクタールで，その生産数量は88万トンである。これに次いで，コルトバ州25万ヘクタール，生産数量では25万トン，チャコ州の26万ヘクタール，22万トンであり，ラパンパ州で，10万ヘクタール，生産数量で約8万トンなどである。

ヒマワリは油の形態で輸出されるが，1979年の輸出数量は，凡そ23万トンであって，世界輸出数量の28.8%を占めるといわれている。

亜麻の収穫面積は，97万8,000ヘクタールであって，生産数量は74万トンである。アルゼンチンの亜麻はカナダに次いで世界第2位といわれているが，種子は油の形態でも輸出されるようである。

亜麻の主産地はブエノス・アイレス州34万7,000ヘクタール，生産数量30万トン，エントレ・リオス州32万4,000ヘクタール，生産数量20万トン，サンタ・フェ州の18万4,000ヘクタール，14万トン，コルトバ州11万7,000ヘクタール，約10万トンである。その他の州を合算しても，その生産数量は4,000トンに過ぎない。

ヒマワリの生産

年次別	収穫面積 (1,000ha)	1ヘクタール当り収量 (kg)	生産数量 (1,000トン)	参考 (1,000トン) ひまわり油生産数量	同輸出数量
1975年	1,005	728	732	209	0
76	1,258	862	1,085	307	38
77	1,233	730	900	321	131
78	2,000	800	1,600	410	184
79	1,557	918	1,430	471	226
80	1,855	889	1,650	–	–
(産地州別)	(1980年)				
ブエノス・アイレス	1,000	882	882	(注)世界輸出量 784,000トン	
コルトバ	252	1,004	253	内アルゼンチン 226,000	
チャコ	260	858	223	28.8%	
サンタ・フェ	38	816	31	輸入国	
ラ・パンパ	102	745	76	ヨーロッパ諸国50%	
サンルイス	33	962	31		
その他	170	906	154		
計	1,855	889	1,650		

亜　麻　の　生　産

年次と州別	収穫面積（1,000ha）	1ヘクタール当り収集（kg）	生産数量（1,000トン）
１９７５年	501	761	381
７６	446	845	377
７７	674	915	617
７８	884	916	810
７９	817	734	600
８０	978	760	743
（重要産地州）			
ブエノス・アイレス	347	873	303
エントレ・リオス	324	611	198
サンタ・フェ	184	766	141
コルトバ	117	829	97
その他	6	667	4
計	978	760	743

（原　料　作　物）

(1)　ブドウの産地

この国ではブドウ酒の生産量が多く，国内消費もきわめて旺盛である。そのためブドウの生産は安定しているが，その生産は醸造用に主として向けられることから，醸造向けの品種が多い。１９７９年の栽培面積は３４万2,000ヘクタールで，その収穫面積は，最近５カ年間ほとんど変化がない。その生産数量は３５０万トンと推計されている。

その主要産地は，メンドーサ州２３２万トン，サン・アァン州９０万トン　リオネグロ10万トンなどが多く，ラ・リオーハ州５万トン，カテマルカ州５万トンなどが主産地であるが，その他州で生産されるのは僅かであり，各州の合計でも８万トンに満たない数量である。

ブ ド ウ の 生 産

年次と州別	栽培面積 (1,000ha)	収穫面積 (1,000ha)	1ヘクタール当収量 (kg)	生産数量 (1,000トン)
1975年	342	331	9,360	3,100
76	343	339	11,091	3,760
77	343	341	9,971	3,400
78	343	341	8,211	2,800
79	342	341	10,264	3,500
（主要産地州別生産） 1979年				
メンドーサ	247	246	9,411	2,315
サン・ファン	62	62	14,581	904
リオ・ネグロ	15	15	6,933	104
ネリオーハ	7	7	7,286	51
カテマルカ	4	4	12,000	48
その他	7	7	11,143	78
計	342	341	10,264	3,500

(2) さとうきびの産地

この国ではさとうきびの生産が行なわれているが，その栽培地域が北部亜熱帯に集中していることから，作付面積は安定している。1980年の面積は33万7,000ヘクタールで，さとうきびの生産数量は1,500万トンである。

主産地は，ツクマン州が23万5,000ヘクタールで，867万トン，これに次いで，フフイ州5万ヘクタール，374万トン，でサルタ州2万3,000ヘクタールで，174万トン，サンタ・フェ州1万6,000ヘクタール，56万トンなどである。その他の州は合計して29万トンを下廻る数量である。

さとうきびは砂糖に製造され，その74%が国内で消費されるが，26%は輸出される。

さとうきびの生産

年次と州別	さとうきび			さとう製品（1,000トン）		
	植付面積 1,000ha	1ヘクタール当収量(トン)	生産数量 1,000トン	生産数量	内国内消費数量	内輸出数量
1975年	348	45	15,600	1,432	984	492
76	351	41	14,310	1,261	1,050	171
77	360	44	16,000	1,550	904	500
78	356	38	13,600	1,580	851	604
79	351	40	14,120	1,307	971	431
80	337	45	15,000	1,310	970	275
（主要産地州別） 1980年						
ツクマン	235	37	8,673			
フフイ	50	75	3,741			
サルタ	23	76	1,741			
サンタ・フェ	16	35	560			
その他	13	22	285			
計	337	45	15,000			

（注） さとう製品の生産数量は国内消費数量と輸出数量の合計とは処分の時期にズレがあるので一致しない。

(3) 綿の産地

この国の綿の産地は，北部の諸州にある，その栽培面積は僅かづつ増加しつつあるが，ほとんど安定して栽培されている。1980年の収穫面積は56万8,000ヘクタールで，その綿花の生産量は53万トンである。

最も多く産するのは，チャコ州で39万ヘクタール，34万トン余の生産がある。これに次いで，フォルモーサ州8万ヘクタール，8万トン，サンタ・フェ州6万6,000ヘクタールで凡そ6万トン，サンチャゴ，デル・エステロ州が3万ヘクタールで2万4,000トンであるが，コリエンテス州でも1万5,000ヘクタールに栽培され，1万2,000トンの生産がある，その他州は全部合せても1万トン程度の生産に過ぎない。

年次と州別	収穫面積 1,000ha	1ヘクタール当収量(kg)	生産数量（1,000トン）		
			綿花	種子	せんい
1975年	505	1,071	541	314	172
76	414	1,075	445	259	140
77	518	992	514	300	160
78	607	1,176	714	114	220
79	669	856	573	329	174
80	568	935	531	320	160
（主要産地州別生産）	1980年（植付面積）				
チャコ	390	879	343		
フォルモーサ	80	1,050	84		
サンタ・フェ	66	864	57		
サンチャゴ・デル・エステロ	31	774	24		
コリエンテス	15	800	12		
その他	9	1,222	11		
計	591	898	531		

（注） 州別の面積は植付面積である，そのため1ヘクタール当たり収量は若干少くなる。

（嗜好作物）

(1) 煙草の産地とマテ茶の産地

この国の葉煙草の栽培は5万8,000ヘクタールに過ぎないが，その生産数量も6万トン余りである，その1／3は輸出に向けられている。その産地は北部州に多く収穫面積でみると，サルタ州が1万8,000ヘクタールで，2万2,000トンが生産され，フフイ州では1万5,000ヘクタールで，1万9,000トンが生産される。コリエン・テス州で1万1,000ヘクタールで，1万トンが生産される。ミシオネス州とジクマン州でそれぞれ5,000トンの生産が行なわれている。

マテ茶の産地はミシオネス州だけである。栽培面積は4万ヘクタールで安定しており，そのうちミシオネス州で3万8,000ヘクタールが栽植され，その生産は14万2,000トンである。マテ茶は国内消費が多く僅かに輸出されるに過ぎない。

煙　草　の　生　産

年次と州別	収穫面積 1,000ha	1ヘクタール当収量 (kg)	生産数量 1,000トン	内輸出数量 1,000トン	輸出価額 1,000ドル
1977年	75	1,200	90	24	22,638
78	62	1,016	63	23	26,414
79	75	933	70	22	29,830
80	58	1,069	62	−	−
（主産州別生産）	1980年			割　合	
サルタ	18	1,222	22	35.5%	
フフイ	15	1,267	19	30.6	
コリエン・テス	11	909	10	16.1	
ミシオネス	7	714	5	8.1	
ツクマン	4	1,250	5	8.1	
その他	3	333	1	1.6	
計	58	1,069	62	100.0	

マ　テ　茶　の　生　産

年次	栽植面積 1,000ha	1ヘクタール当収量 (kg)	生産数量 1,000トン	内輸出数量 トン	輸出価額 1,000ドル
1978年	43	2,395	103	4,091	3,217
79	41	3,049	125	2,539	3,146
80	41	3,732	153	−	−
（州別生産）	1980年				
ミシオネス	38	3,737	142		
その他	3	3,667	11		
計	41	3,732	153		

（野　菜　作　物）

(1)　ポロット豆の産地

この国で栽培される豆類（大豆を除く）はポロット豆が最も多く，１９８０年の収穫面積が２４万1,000ヘクタールであり，１７万8,000トンの生産であるが，主要な産地は，サルタ州で，１１万7,000トンで全国の生産数量の65.7％を占めている。これに次いで，サンチャゴ・デ・エステル州が２万1,000トンで，ツクマン州で２万トンを産する。この３州で，88.7％を占めその他の各州で生産される数量は２万トンで11.3％である。

このポロット豆はヨーロッパ各国に輸出されており，国内消費は少ないようである。

ポ　ロ　ッ　ト　豆　の　生　産

州別	収穫面積 1,000ha	1ヘクタール当収量(kg)	生産数量 1,000トン	構成比(％)
サ　ル　タ	－	－	117	65.7
サンチャゴ・デ・エステル	－	－	21	11.8
ツ　ク　マ　ン	－	－	20	11.2
そ　の　他	－	－	20	11.3
計	241	739	178	100.0

(2)　レンズ豆，えんどう豆の産地

レンズ豆とえんどう豆の生産はきわめて少なく，レンズ豆は１万7,000ヘクタール，えんどう豆（乾）は１万9,000ヘクタールで青莢用のえんどう豆は１万4,000ヘクタールで，３万9,000トンの生産である。これらの豆類の産地は，ブエノス・アイレス州サンタ・フェ州，ツクマン州の３州であり，その他の州で生産されるものはきわめて少量である。

レンズ豆，えんどう豆の生産

州別	収穫面積 1,000ha	1ヘクタール当収量(kg)	生産数量 1,000トン	構成比(％)
①レ　ン　ズ　豆	17	1,000	17	100.0
サ　ン　タ・フ　エ	－	－	11	64.7
ブエノス・アイレス	－	－	6	35.3
ツ　ク　マ　ン	－	－	0.1	0.0

次ページへ続く

州別	収穫面積 1,000ha	1ヘクタール当り収量(kg)	生産数量 1,000トン	構成比(%)
②えんどう豆(乾)	19	995	19	100.0
ブエノス・アイレス	−	−	12	63.2
サンタ・フェ	−	−	6	31.6
その他	−	−	1	5.2
③えんどう豆(青莢)	14	2,786	39	100.0
ブエノス・アイレス	−	−	27	69.2
サンタ・フェ	−	−	9	23.1
ツクマン	−	−	3	7.7

(3) トマトの産地

この国で生産される，トマトは1980年に3万ヘクタールの植付面積で54万6,000トンが生産されている。

最も多い産地は，メンドーサ州6,300ヘクタールで，8万3,000トン，ブエノス・アイレス州は約2,700ヘクタールで，8万1,000トン，リオ・ネグロ州，5,600ヘクタールで，6万トン，サルタ州2,300ヘクタール，5万9,000トン，コリ・エンテス州2,200ヘクタールで，4万9,000トン，フフィ州1,500ヘクタールで，4万トン，サンファン州が1,600ヘクタールで2万4,000トン，サンタ・フェ州600ヘクタール，2万トンの生産である。その他の州の合計で13万9,000トンとなっている。

このトマトの1ヘクタール当たりの，単収をみると多大な差異がある。最も多いのは，サンタ・フェ州33トン余であり，ブエノス・アイレス州30トン，フフィ州26.6トン，サルタ州25.6トン，コリ・エンテス州は22トン余であるが，比較的少ないのは，サンファン州15トン，メンドウサ州13トン余であり，リオ・ネグロ州が10.7トンが最も少ない。しかし，トマトのごとく8州以上の各州にもわたって栽培されている作物は少なく，トマトの栽培適地の広いことを示している。

トマトの生産（１９８０年）

主要産地州別	植付面積（1,000ha）	1ヘクタール当り収量（kg）	生産数量（1,000トン）
メンドーサ	6.3	13,175	83
ブエノス・アイレス	2.7	30,000	81
リオ・ネグロ	5.6	10,714	60
サルタ	2.3	25,652	59
コリ・エンテス	2.2	22,273	49
フフイ	1.5	26,667	40
サンファン	1.6	15,000	24
サンタ・フェ	0.6	33,333	20
その他	8.1	16,049	130
計	30.9	17,670	546

(4) じゃがいもの生産

１９８０年の全国の収穫面積は１１万4,300ヘクタールで，その生産数量は１７７万トンと公表されている。

年間４期の作型があり，早植，やや早植，やや晩植，晩植に分けられているが，最も多いのが，やや晩植といわれる作型で７万5,700ヘクタールに栽培されており，１３５万トンの生産があり，１ヘクタール当たりの収量が最も多い。これに次いで，やや早植は２万5,000ヘクタールに栽培されており，２０万7,000トン，早植は9,500ヘクタールで，１０万3,000トンが生産される。最も遅い晩植の作型は8,600ヘクタールに栽培され，１１万トンが生産される。

じゃがいもの生産（１９８０年）

作型	収穫面積（1,000ha）	1ヘクタール当り収量（kg）	生産数量（1,000トン）
早植	9.5	10,842	103
やや早植	20.5	10,098	207
やや晩植	75.7	17,834	1,350
晩植	8.6	12,791	110
計	114.3	15,486	1,770

(5) たまねぎの産地

1980年のたまねぎの生産は全国で1万7,600ヘクタールで，その生産数量は27万8,000トンであった。

最も多く生産されるところは，サン・ファン州で，3,300ヘクタール，7万トンが生産されており，これに次いで，メンドーサ州で，2,700ヘクタールが栽培され5万6,000トンが生産されている。ブエノス・アイレス州では2,300ヘクタールで，2万9,000トンが生産される。リオ・ネグロ州500ヘクタールで1万トン，コルトバ州で500ヘクタールで9,000トンの生産となっており，その他の各州合計で，8,300ヘクタールが栽培され，10万4,000トンが生産されるので，比較的多くの州に分布しているようである。

たまねぎの生産

年次と州別	収穫面積 (1,000ha)	1ヘクタール当収量 (kg)	生産収量 (1,000トン)	
1978年	16.3	16,135	263	
79	16.9	15,976	270	
80	17.6	15,795	278	
(主要産地州別)	1980年			割合(%)
サン・ファン	3.3	21,212	70	25.2
メンドーサ	2.7	20,741	56	20.1
ブエノスアイレス	2.3	12,669	29	10.4
リオ・ネグロ	0.5	20,000	10	3.6
コルトバ	0.5	18,000	9	3.2
その他	8.3	12,530	104	37.5
計	17.6	15,795	278	100.0

(6) にんにくの産地

この国では，にんにくが多く消費されることから，各地で栽培されているが，多く栽培されているところは，ブエノス・アイレス州とメンドーサ州であり，ブエノス・アイレス州で，8,900ヘクタールが栽培され，4万1,000トンの生産があり，全国生産の48.2%を占めている。これに次いで，メンドーサ州で6,000ヘクタールが栽培されており，その生産数量は，3万7,000トンである。この2つの州で全国生産の91.7%を占めている。コルトバ州にも1,200ヘクタールが栽培されているが，5,000トンの生産に過ぎない。その他の州で生産されるものは，きわめて少量で，栽培面積は2,700ヘクタールとなっているが，生産数量は，

2,000トンに過ぎない。にんにくはかれてから，ブラジルやフランスなどに輸出されているが生産数量の大部分（60%以上）が国内で消費されることから国内価格の動きに関連して生産されるようである。

にんにくの生産

年次と州別	収穫面積 1,000ha	1ヘクタール当収量 (kg)	生産数量 1,000トン	内輸出数量		
				計	ブラジル	フランス
1978年	17.0	4,647	79	24	20	3
79	16.8	4,821	81	33	24	3
80	18.7	4,545	85	－	－	－
（生産地州別）				割合		
ブエノス・アイレス	8.9	4,607	41	48.2%		
メンドーサ	6.0	6,167	37	43.5		
コルトバ	1.2	4,167	5	5.9		
その他	2.6	769	2	2.4		
計	18.7	4,545	85	100.0		

（果実作物）

(1) りんごの産地

この国の統計では果樹類の栽植面積は統計されていないが，生産数量は予想収量と推定実収高が公表されるようである。

りんごの生産をみると，全国の生産数量は95万8,000トンであるが，その主産地はリオ・ネグロ州の66万トン（68.9%），メンドーサ州が14万2,000トン（14.8%），ネウケン州11万9,000トンで（12.4%），ブエノス・アイレス州では1万4,000トンで（1.5%）あり，サンタマレ州が2,000トンで（0.2%），その他の各州の生産量は僅かに2万1,000トン（2.2%）である。

りんごは気候的に恰適する各州に分布している。

(2) オレンジの産地

オレンジの全国生産数量は，70万6,000トンであるが，最も多いのは，コリエンテス州で，30万6,000トンで43.3%を占めている。これに次いで，エントレリオス州が11

3,000トン(16.0%), ツクマン州7万6,000トン(10.8%), ブエノス・アイレス州5万2,000トン(7.4%), ミシオネス州4万トン(5.7%)その他の各州の合計が11万9,000トンで(16.8%)である。

したがって, コリエンテス, エントレ・リオス, ツクマンの3州で70.1%を占めている。

(3) マンダリン(みかん)の産地

マンダリンは全国で22万4,000トンの生産があるが, 比較的広く分布しており, 最も多いのが, エントレ・リオス州の8万トンで, (35.7%), コリエンテス州3万5,000トンで(15.6%), サンタ・フェ州1万8,000トンで(8.0%), ツクマン州1万7,000トン(7.6%), サルタ州1万2,000トン, (5.4%)などと5州が主産地で, その他の各州にも6万2,000トン(27.7%)が生産されている。

(4) レモンの産地

レモンは全国で39万トンが生産されているが, 最も多いのはツクマン州であり, 30万トンが生産され76.9%を占めている。これに次いでいる州は, サルタ州2万3,000トン(5.9%), コリエンテス州1万8,000トン(4.6%), エントレ・リオス州1万3000トン(3.3%), ミシオネス州1万3,000トン(3.3%)などが主な産地であり, その他の州の合計は2万3,000トンで(6.0%)となっているが, ツクマン州が主産地である。

(5) グレープフルーツの産地

グレープフルーツは全国で13万4,000トンが生産されるが, 最も多いのは, エントレ・リオス州4万6,000トン(34.3%), サルタ州3万トン(22.4%), コリエンテス州1万8,000トン(13.4%), ツクマン州も同じく1万8,000トン(13.4%), フオルモーサ州1万3,000トンで(9.7%)であり, その他の州の合計は9,000トンに過ぎない。

(6) 桃の産地

桃の全国生産数量は23万8,000トンであるが最も多いのは, ブエノス・アイレス州で7万9,000トンで(33.2%)を占めているが, メンドーサ州も6万2,000トンを生産し, (26.0%)を占める。コルトバ州で3万5,000トンが生産され, (14.7%)にあたる。リオネグロ州で2万6,000トンで(10.9%)で, サンタ・フェ州で1万5,000トンで(6.3%)である。その他の州の生産数量が2万1,000トンで(8.9%)である。

(7) 梨の産地

梨の生産数量は全国で15万5,000トンであるが, 主産地はリオネグロ州で10万7,000トンで(69.0%)を占めており, メンドーサ州で3万トンを生産し, (19.4%)である。ネウケン州は1万1,000トンで(7.1%)であり, ブエノス・アイレス州は3,000トンで(1.9%), サンタ・フェ州が1,000トンで(0.6%), その他の州は3,000トンで, 2.0%に過ぎない。したがって, 梨の産地は特定地域に集中している。

果　　実　（１９８０年）

（単位：1,000トン）

りんご	産地	全国	リオ・ネグロ	メンドーサ	ネウケン	ブエノス・アイレス	サンタマレ	その他
	生産数量	958	660	142	119	14	2	21
	割合	100.0	68.9	14.8	12.4	1.5	0.2	2.2
オレンジ	産地	全国	コリエンテス	エントレ・リオス	ソクマン	ブエノス・アイレス	ミシオネス	その他
	生産数量	706	306	113	76	52	40	119
	割合	100.0	43.3	16.0	10.8	7.4	5.7	16.8
みかん（マンダリン）	産地	全国	エントレ・リオス	コリエンテス	サンタフェ	ソクマン	サルタ	その他
	生産数量	224	80	35	18	17	12	62
	割合	100.0	35.7	15.6	8.0	7.6	5.4	27.7
レモン	産地	全国	ソクマン	サルタ	コリエンテス	エントレ・リオス	ミシオネス	その他
	生産数量	390	300	23	18	13	13	23
	割合	100.0	76.9	5.9	4.6	3.3	3.3	6.0
グレープフルーツ	産地	全国	エントレ・リオス	サルタ	コリエンテス	ソクマン	フォルモーサ	その他
	生産数量	134	46	30	18	18	13	9
	割合	100.0	34.3	22.4	13.4	13.4	9.7	6.8
桃	産地	全国	ブエノス・アイレス	メンドーサ	コルトバ	リオネグロ	サンタフェ	その他
	生産数量	238	79	62	35	26	15	21
	割合	100.0	33.2	26.0	14.7	10.9	6.3	8.9
梨	産地	全国	リオネグロ	メンドーサ	ネウケン	ブエノス・アイレス	サンタフェ	その他
	生産数量	155	107	30	11	3	1	3
	割合	100.0	69.0	19.4	7.1	1.9	0.6	2.0
バナナ（79）	産地	全国	フォルモーサ	サルタ	ミシオネス	コリエンテス	フファイ	その他
	生産数量	144	65	72	4	3	0	－
	割合	100.0	45.1	50.0	2.8	2.1	0	－

○　その他の果実　梅69,000トン，　スモモ21,000トン，クルミ　9,000トン
栗及びなつめの生産があるが統計されていない。

(8) バナナの産地

バナナは全国で14万4,000トンであるが，サルタ州とフォルモーサ州に集中しており，サルタ州が7万2,000トン（50.0％），フォルモーサ州6万5,000トン（45.1％）でこの2州で95.1％を占めている。このほかミシオネス州に4,000トン，コリエンテス州3,000トンを産するが，その他の州にはほとんど生産されない。しかもこの国はバナナの輸入国であり，年間17万6,000トンもブラジルとエクアドルから輸入している状況である。

(9) その他の果実

以上のほか，梅6万9,000トン，スモモ2万1,000トン，クルミ9,000トン，及び栗，なつめなども生産されている。

4. 家畜牧養頭数

(1) 肉牛の産地

アルゼンチンの肉牛は1979年に5,686万頭が飼養されている。主産地はパンパ地方に集中しており，ブエノス・アイレス州2,081万頭，コルトバ州881万頭サンタ・フェ州697万頭。エンタル・リオス州422万頭，ラパンパ州325万頭，以上5州で4,406万頭であり，全国の77.5％を占めているが，その半分は，ブエノス・アイレス州の36.6％であって，ブエノス・アイレス州に大牧場が集中している。

その他全国の州別飼養頭数をみると州により多大な差異がある。

(2) めん羊（山羊を含む）の産地

めん羊等羊類の全国の飼養頭数は，3,522万頭であるが，最も多いのはブエノス・アイレス州の960万頭で，これに次いで，クバト州642万頭，サンタ・クレア州629万頭，リオネグロ州330万頭，コリエンテス州219万頭で，エンタ・リオス州140万頭，ラ・パンパ州122万頭などの諸州であり，この7州で，3,042万頭であって，全国の86.4％を占めており，めん羊の産地化が明確である。

(3) 豚の産地

この国では豚の飼養は比較的少なく，全国で355万頭で最も多いのはブエノス・アイレス州116万頭，コルトバ州88万頭，サンタ・フェ63万頭で，この3州が主産地を形成しており，3州で268万頭を飼養していて，全国の75.5％を占めている。その他の諸州は若干づつ飼養されているが，それほど大きな産地はない。

(4) 馬の産地

この国では馬が307万頭も飼養されており，比較的馬の多い国である。馬は牧場の管理や役用に使用されており，乗用としても広く利用されているため，全国の諸州に広く普及している。

肉牛の飼養頭数

（単位：1,000頭）

年次	全国	内ブエノス・アイレス	コルトバ	サンタフェ	エンタリオス	ラ・パンパ	主要5州小計
1974年	55,355	21,508	8,349	7,073	4,409	3,075	44,414
76	58,174	22,032	9,294	7,072	4,315	3,239	45,952
77	61,055	22,800	9,524	7,243	4,857	3,639	48,063
79	56,864	20,814	8,814	6,970	4,218	3,248	44,064
全国を100とする比率	100.0	36.6	15.5	12.3	7.4	5.7	77.5

（各年6月30日現在）

（主要5州を除く）

州別	1974	1977	州別	1974	1977
コリエンテス	3,757	4,414	メンドーサ	173	295
チャコ	1,522	1,873	ラ・リオハ	176	216
フォーモーサ	1,253	1,280	ジュジュイ	109	106
ササ・ルイス	1,171	1,391	サン・フアン	19	51
サンチャゴ，デ・エステロ	933	1,152	リオ・ネグロ	308	412
サルタ	592	694	ネウケン	154	186
カテマルカ	189	249	クバト	115	134
ツクマン	224	255	サンタ・クレア	26	33
ミシオネス	203	236	その他	17	15

羊類，豚，馬の飼養頭数（1977年）

（単位：1,000頭）

	めん羊及山羊	豚	馬
全国	35,220	3,552	3,073
ブエノス・アイレス	9,598	1,163	620
コルドバ	551	883	306
サンタ・フェ	126	634	230
ラ・パンパ	1,217	134	90
エンタ・リオス	1,403	82	250
コリエンテス	2,193	31	316
チャコ	235	112	244
フォモーサ	125	56	114
サンルイズ	258	29	73
サンチャゴ・デエステロ	695	130	208
サルタ	305	72	77
カテマルカ	134	12	40
ツクマン	80	28	54
ミシオネス	7	108	22
メンドーサ	198	25	69
ラ・リオス	66	7	22
フジュー	566	6	20
サンファン	48	12	21
リオネグロ	3,255	5	89
ネウケン	714	4	59
クバト	6,421	8	90
サンタ・クレア	6,290	1	56
その他	735	10	3

第 2　農産物の流通

1. 農産物の一般的流通構造

アルゼンチンにおける農産物の流通は，生産者（農家）が，産地の仲買人に売渡し，産地仲買人が商社または卸売人に販売し，卸売人から小売商が買受けて，消費者に販売するというのが通常のルートである。

この国の農業の経営がその規模において多大な開差があるため，農家の協同組織は発達していない。少数の農家が自由に加入する農業協同組合があるが，農家の協同組織というよりも農協経営者が取引先たる農家に加入を依頼して集合されているような感じである。

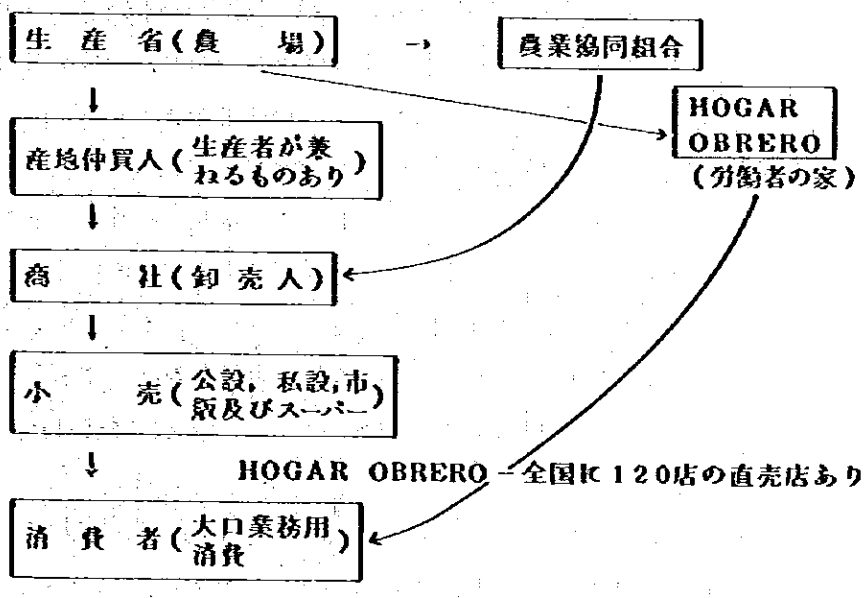
したがって，農業協同組合の農産物集荷力はきわめて小さい。しかし，地方により強力に活動している組織もある。

経営規模の大きな農家の中には産地仲買人を兼ねている者があり，仲買人は専問の商人だけではない。

近年HOGAR, OBREROという消費組合が発達し，全国に１２０店の直売店（スーパーマーケット）を経営しているが，この組織を「労働者の家」とも呼んでいる。

この組織は農家と契約栽培をしたり，各地に農産物加工場を経営しており，これらの製品も直売店で販売している。

① 農産物の一般的流通構造



2. 穀物の流通構造

この国では小麦を中核とする穀物が農産物の大宗であり，最大貿易商品であることから政府も各種の施策を進めてきた。その最たるものは，穀物公社（JUNTA）である。

穀物公社は穀物の国内価格を公定しており，生産者販売価格についても仲介することになっていることから，他と異なる流通構造をもっているようである。

この国の農業の規模が広大なものから零細なものまできわめて広く分散することから，その流通形態も多様である。

中小の生産農家は収穫期または青田（掛売り）で産地仲買人に売渡すといわれている。

大規模の生産農家は自家用サイロを設備して保管し，市況を勘案しつつ平均売りをするようである。

この国には国際穀物商といわれる大商社があり，これらの商社は各地の町にサイロを設備しており，産地買付人を配置して買付け業を行なっている。

穀物公収（JUNTA）は小麦については最低支持価格制度により，生産農家が産地仲買人や商社に不当に安い価格で買付けられたときは生産者の申出により介入し価格を改訂させることができる。

穀物の流通経路は生産農家が産地仲買人か商社に販売するが，一部は農業協同組合が集荷するものもある。

産地仲買人や小さな穀物商は大きな穀物商か輸出商社に売渡すものもある。

商社は外国向けに輸出するものは貿易商社と契約する一方穀物公社（JUNTA）に輸出の許可を求めることになっている。

輸出が許可された数量は穀物公社（TUNTA）を通じて輸出される。

穀物を輸出する場合外国商社と輸出契約をするのは商社であり，穀物公社に対し輸出の登録と輸出数量の許可を貰う必要があるが，現品は民間の所有である。

輸出貨物は輸出港の穀物公社（JUNTA）事務所で受付け，品質検査（水分選別など品質の統一）とその保障を行なって，輸送船に積載するまでの業務を行なう。また穀物公社は国内の穀物需要を確保する任務もある。商社の輸出を自由にすると国内需要が不足して価格が高騰した経験もある。したがって，国内消費量を確保するため，不足を生じるような場合は輸出を認めないこともある。穀物公社は輸出品について手数料を徴収する。

１９８０年の穀物輸出数量は，1,443万トンであった。この内訳は粗粒穀物1,260万トンで，園産物１８３万トンである。

この粗粒穀物の中には小麦４４８万トン，とうもろこし３５２万トン，ソルゴー１５２ 万トン，その他の穀物が３０８万トンであるが，このほかに大豆２７１万トンが輸出されている。

小麦の輸出比率は５５.３％であり，国内消費向け数量は３６２万トンである。また大豆の輸

出比率は77.4%であるから大豆の国内消費向け数量は79万トンである。

国内消費向けの穀物は生産農家から買付けた商社が加工業者に販売しており，加工製品はメーカーから卸売人に販売され小売人を通じて消費者が購入する仕組みである。

この国の穀物相場についてはアルゼンチン穀物取引所があり，古くから発達しているが実績数値をみると，アメリカのシカゴ穀物取引所の相場に連動しているようである。

いずれにしても，穀物の大商社が存在して大量の輸出を行なう状況から，先物取引とそのためのヘッヂの必要性があり，投機市場への需要は大きいようである。

この国の穀物取引はその流通過程の経費が高く，生産農家の手取部分が過少であるといわれている。

それは中間業者が産地仲買人，中間仲買人（仲間取引）商社さらには輸出商社となっていて，中間利潤が多くなり生産農家の手取りが少なくなるといわれているためであり，流通設備が不備であるということも関連している。

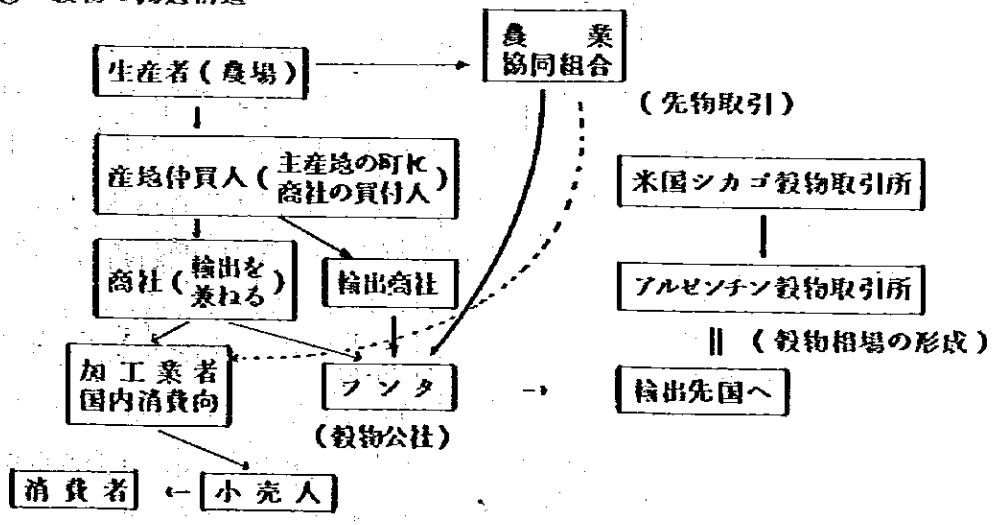
国内輸送費がきわめて高いうえ，港湾施設がきわめて悪い。特に穀物輸出の多い港であるブエノス・アイレス港とロザリオ港は共に河岸港であり，水深が浅く，輸送船舶は最大2万5千トン級の船で運ばれている。しかもJUNTAのカントリエレベーターの能力は1時間500トン程度を積み込んでおり，輸出先国に到着するまでのコストが多きくなり過ぎるといわれている。

この国の商社は小麦で計算すると，ロッテルダム相場の70%を受取る結果となり，生産農家の手取りは45%に過ぎない。

ここに輸出穀物の流通問題がある。

穀物の流通構造を図表化するとつぎのようである。

② 穀物の流通構造



3. 食肉の流通構造

アルゼンチンの食肉は世界有数の産地であり，大きな牧場国である。牛の飼養頭数は１９７８年頃は６千万頭を越えていたが，近年は若干減少している。肉牛の生産はパンパ地方に偏在しており，ブエノス・アイレス州に集中しているが，コルドバ州，サンタ・フェ州，エントレ・リオス州，コリエンテス州，ラ・パンパ州の６州に牧場が多い。これらの大牧場のある州とこれらの州より少ない諸州とは食肉の流通も若干異なる点がある。

食肉は他の農産物と異なり，と殺しなければ消費に向けられない。そのため，大牧場のある州とそうでない州とではその流通が若干異なるようである。

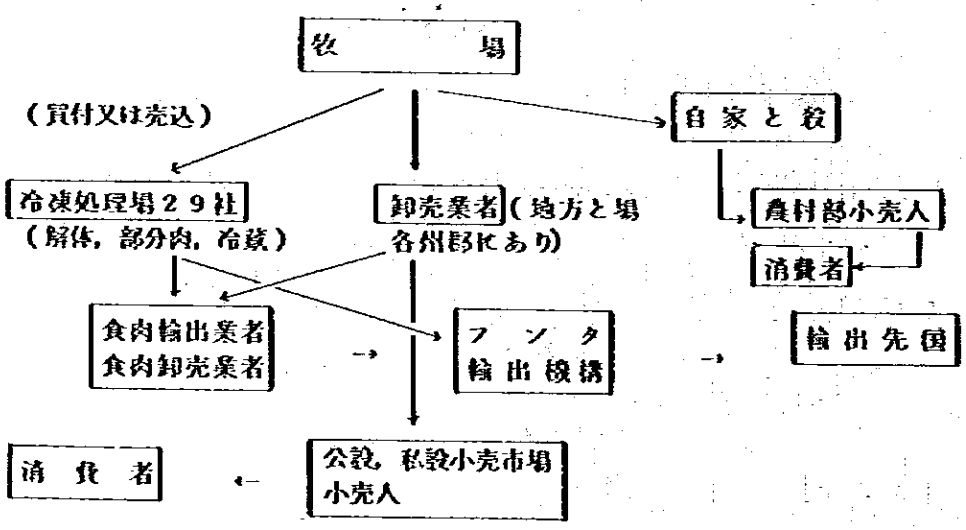
肉牛の１９７９年のと殺頭数は1,526万頭で牛肉生産数量は３０９万トンであって，このうち国内消費数量は，２４０万トンであるから，その割合は77.7％を占める。したがって，輸出数量は２２３％である。

この国は食肉の大輸出国といわれながら１９８０年の牛肉輸出量は６９万トンに過ぎない。

この国では大規模な冷凍工場（実際は解体処理冷蔵所）が２９社もあるが，地方のと殺場には近くに卸売業者がおり，農村部に小さいと殺場がある。冷凍工場は大牧場から直接買付けを行なうが，牧場から売りにくるものもある。これらの冷凍工場はと殺，解体して部分肉として冷蔵し，直接TUNTAを通じて輸出するか食肉輸出業者に売渡すほか，国内消費向けの肉は食肉卸売業者に売渡すが，売渡すときは相対取引で通常は定価販売である。

と殺場は各州の各郡にあり，地方では食肉業者が牧場から買取った動物をと殺して食肉の仲買人を通じて小売人に販売してから消費者に販売される仕組みである。したがって，冷凍工場を通ずる流通経路と各地の食肉の流通経路は若干異るようである。

食　肉　の　流　通　構　造



食肉の生産と流通（１９７９年）

（単位：1,000頭）

種別	飼養頭数	と殺頭数	内冷凍工場取扱分	割合（%）	仕向先	
					輸出向	国内向
肉牛	56,864	15,617	6,900	44.2	2,982	12,635
めん羊（山羊を含む）	35,220	7,862	2,090	26.6	1,832	6,030
豚	3,552	2,829	1,850	65.4	5	2,824
馬	3,072	257	－	－	0	257

（注）1. 冷凍工場は近代設備を備えており，解体して部分肉で冷蔵する。

2. 輸出業者は８８社であり，JUNTAの許可を受けて輸出する。

3. １９８０年の主な輸出国はソ連８万７千トン，米国３万４千トン，イギリス３万３千トン，西独２万トン，ギリシャ１万２千トン，イタリア１万トン等である。

4. 青果物の流通構造

この国で野菜といわれているのは，ポロット豆，レンズ豆，えんどう豆などの豆類と，トマト，じゃがいも，たまねぎ，マンジョカ，にんにくなどが統計されているが，現実にはこのほか，かぼちゃ，すいか，きゅうり，などの果菜類やレタス，きゃべつ，ふだんそう，ほうれんそう，パセリ，セロリーなど多くの葉菜類が市場で取引されている。

果実類では，りんご，梨，桃，オレンジ，マンダリン，レモン，グレープフルーツ，バナナ，などが統計されているが，実際には，このほか，いちご，スモモ，梅，栗，くるみ，など数多くの，果実が市場で販売されている。

青果物の流通は生産農家が直接卸売市場の卸売人に委託して販売するものが多いようであるが，一部には農業協同組合で集荷荷造りして出荷するものもある。

果実の場合は栽培規模の大きな農家が多く生産者が卸売市場に店舗を開設している人もあり，同時に他の生産者の出荷したものの委託を受けているが，卸売専門業者が多い。日本の仲卸業者程度の荷さばきをする卸売人であり，日本の中央卸売市場の荷受会社のごとき会社はない。

(1) 建値市場の形成

この国の市場は多くの卸売人（問屋）が売場を借りて，店舗を張り，小売人に対して相対の方法で卸売りを行なっている。こんな卸売市場が，ブエノス・アイレス市に１１市場あり，ブエノス・アイス郊外に１４市場がある。したがって，大ブエノス都圏に２５市場が

散在しているわけである。

２５か所に相対市場があっても，毎日価格を形成することができない。

ところが，アルゼンチンの青果物価格の標準となる価格を形成する建値市場がある。この国の流通問題では登場したことのない建値市場が古くから成立していたのである。

A．その一つは青果物競売所である

この競売所の経営者は市場の倉庫を設置して，競売希望者に使用料を徴収して貸すだけである。但し場内の取引方法についての制度をきめており，その秩序を維持しつつ運営している。

果実の取引は，月・水・金の週３日とし，野菜の取引は火・木・土と週３日である。

出荷者は生産者か産地仲買人でこの競売所に登録すれば使用できることになっている。

販売しょうとする品目，例えばたまねぎ，は一定の荷姿（１５kg入ネット入り）で玉の大きさで区分して，玉の大きさ別に袋積みし，販売数量を明示して一区画に積荷しておき，買受人が下見できるようにしておくだけである。

販売順は出荷者で協議して販売順をきめる。販売する人，（品名，品質，量目，せり荷口数量などの読み上げ人，１人，せり人１人，買受人名と落札価格を記録する書記１人計３人）は出荷者側の人であり，競売所側は売買に関与しない。

この競売所で取引される価格はブエノス・アイレス市及びアルゼンチンの青果物取引価格の標準建値となっている。

この競売所に参加する買受人は大ブエノス圏の２５市場で営業する卸売人である。

競売所に出荷する荷主は規模の大きな生産農家か，産地仲買人であり，何日も連続出荷するほどの生産農家である。

この国では生産農家が直接市場でせりをして買受人との間で価格を形成する。したがって大農の生産コストで価格は成立するので，生産コストの高い中小生産者たる農家は不利であるとみなければならないようである。

B．かんきつ取引所

この取引所はかんきつ生産者組合の経営する市場で実際は卸売市場アバストの地下室を使用し事務は一切生産者組合が担当する。

ここでは見本を並べておきその生産者の本日販売する，せり荷口ごとの品名，品位等級，せり荷口数量を記入し「販売品一覧表」を買受人の数だけ，入口に提出する。通常買受人が，１５０人から２００人程度であることから，印刷物は３００部程度を準備する必要がある。販売する人，（読み上げ人，せり人，書記の３人）は生産者農家の職員が担当する。

売買の成立した荷口については複写式の伝票３枚に記入し，取引価格を記入して，出

荷者，買受人，取引所で保存する。実際に買受けた現品は生産者の倉庫に在庫するので，7日以内に買受人が代金を持参して引取ることになっている。

この場合出荷者は前日迄の価格を勘案して数値を記入しておく（前日の価格），この価格より2割以上の安値の場合は出荷者はその物件については売止めしてもよいことになっている。

取引所は取引価格を基準として一定の額を手数料として出荷者から徴収している。

取引所は取引には直接関与しないので，この取引所では現金の取引はしない。

ここで成立した価格がブエノス・アイレス及びアルゼンチンのかんきつ類の標準建値となっている。

C．りんご，なし取引所

この取引所は以前はかんきつ取引所の中で果実取引所として市場を形成したが，組織者の間に意見の相異があり，10年前から分離独立して，取引所を開いており，生産者組合の経営である。この生産者組合の加入資格は年間80万箱以上の生産者であるから，巨大な生産者の団体である。

現在の組合員は9人に減少している。これらの生産者は年間を通じて，毎週6日（日，曜は休み）続けて出荷していることをみても，いかに大規模の生産者の組織であるかを知ることができる。

この取引所は見本を出さないで品名，品位等級，せり荷口の数量，前日価格（数値）を印刷した，販売一覧表を配布して，出荷者別にせりを行なう。（販売表はA3版5－6枚片面印刷である）

販売する人（読上人，せり人，書記）は，取引所の職員が担当する。

入札価格が前日価格より2割以上安いときは出荷者は売止めしてもよい。

買受人は落札がきまると1時間以内に取引所の会社にその代金を支払うことになっている。代金は7日以内であるが，即日支払いの場合は若干割引することになっている。

売上伝票は3枚復写であり，出荷者，買受人，取引所が各1枚所持するものである。

現品は出荷者の倉庫に在庫するので，出荷者の倉庫渡しとなっており，取引所の領収書を持参すれば現品を渡すことになっている。

この場合も取引所は取引手数料を出荷者から徴収するが，代金は買受人から取引所が収納しているので手数料，諸掛を差引いて出荷者に銀行送金することになっている。

また出荷者の倉庫はブエノス・アイレス市内で近いところにあり，冷蔵設備のある倉庫である。

この取引にはブエノス・アイレス市及び近郊の卸売市場の卸売人が買受人として参加し，その取引価格は，この国の標準建値となっている。

(2) 卸売市場

ブエノス・アイレス市には，１１の卸売市場がある。最も大きいのが，市営のドレーゴーで卸売人が５５０人である。これに次いで大きいのが，アバストで卸売人は３００人であり，この市場ができてから７０年の歴史がある。このほかサルディヤ，ヒネート，リニエルスなどが大きい方で，その他に６市場があるが，市設公営卸売市場はドレーゴーだけである。その他はすべて民営で，卸売市場の建物と管理を会社経営としており，卸売人は，市場使用料を支払って営業するが，アバストの場合は卸売人が売場を権利金を支払って買っている者があり，経営は複雑になっている。

ロザリオ市には卸売市場が２カ所あり，１所は，メルカードデプットクトールと呼ぶ。他の１つをメルカードフィッシャートンと呼ぶ。

両市場共大きな舎屋で，広い市場である。中央に貨物自動車で荷物が搬入できるようになっており，両側壁面に卸売人の売場がある。中央部は生産農家の立売所となっている。

卸売方法はすべて相対売りであり，卸売人が買付けた品と生産者の委託を受けて販売することになっている。

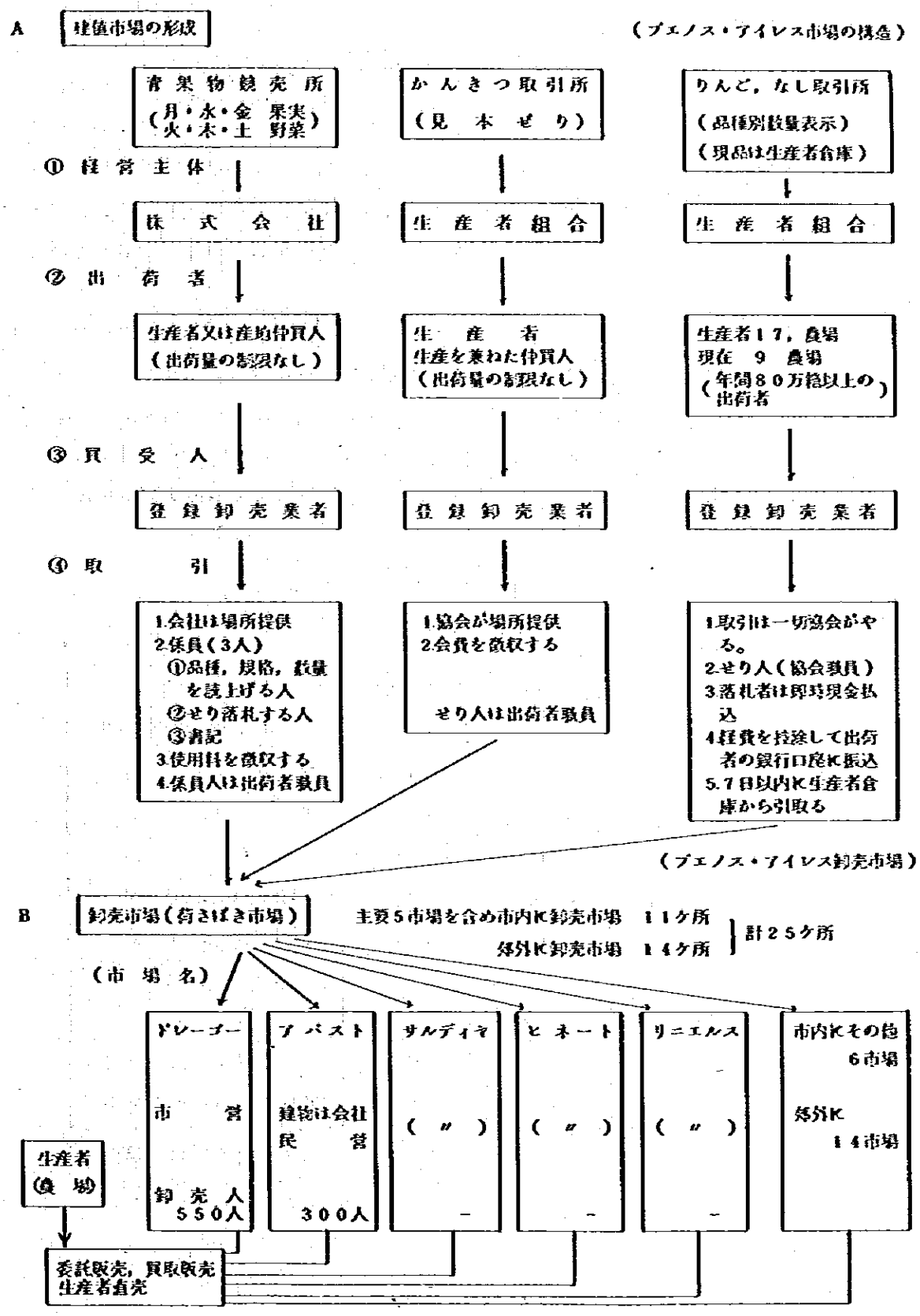
バイヤブランカの卸売市場は２カ所あり，１つをメルカードアバストと呼び１つを協同組合の市場と呼んでいる。協同組合の市場はほとんど全部生産農家の売場であり，当日の販売人が交替するようである。しかし，一部の卸売業者の売場もあるがこれらの卸売人は他の市場の卸売人と同様に相対売りをしている。

(3) 小売市場

ブエノス・アイレス市には公設小売市場があり，市営のもの６４所と民営のもの２０所計８４所もある。

市内には，個人商店として小売するものは，青果物で１１,０００店，肉屋6,０００店，畜産加工品，８００店，魚屋が1,２５０店などがあるという。この数は正確に統計されていないが，生鮮食品の小売り店が１９,０００店ほどあると推定されている。

③　青果物の流通構造


A　建値市場の形成
（ブエノス・アイレス市場の構造）
青果物競売所
（月・水・金　果実）
（火・木・土　野菜）
かんきつ取引所
（見本せり）
りんご，なし取引所
（品種別数量表示）
（現品は生産者倉庫）
①経営主体
株式会社
生産者組合
生産者組合
②出荷者
生産者又は産地仲買人
（出荷量の制限なし）
生産者
生産を兼ねた仲買人
（出荷量の制限なし）
生産者17，農場
現在　9　農場
（年間80万箱以上の出荷者）
③買受人
登録卸売業者
登録卸売業者
登録卸売業者
④取引
1.会社は場所提供
2.係員（3人）
①品種，規格，数量を読上げる人
②せり落札する人
③書記
3.使用料を徴収する
4.係員人は出荷者職員
1.協会が場所提供
2.会費を徴収する
せり人は出荷者職員
1.取引は一切協会がやる。
2.せり人（協会職員）
3.落札者は即時現金払込
4.経費を控除して出荷者の銀行口座に振込
5.7日以内に生産者倉庫から引取る
（ブエノス・アイレス卸売市場）
B　卸売市場（荷さばき市場）
主要5市場を含め市内に卸売市場　11ケ所
郊外に卸売市場　14ケ所
計25ケ所
（市場名）
ドレーゴー
市営
卸売人
550人
アバスト
建物は会社
民営
300人
サルディヤ
（〃）
ヒネート
（〃）
リニエルス
（〃）
市内にその他
6市場
郊外に
14市場
生産者
（農場）
委託販売，買取販売
生産者直売

第３　農産物市場

（海外市場）

この国は農業国である。１９７９年に輸出された商品の総価額（FOB）で７８億０９００万ドルであるが，そのうち農産物の輸出価額は６１億５,５００万ドルであった。その割合は７８.９％を占めており，農業国の実情をよく表わしている。

このような実情からこの国の農業生産は海外市場を度外視して考えることができない。

1.　貿易の構造

この国の貿易構造は輸出金額が７８億ドルに対し，輸入金額が６７億ドルであるから差引き１１億ドルの黒字であるが，最近４か年はこの黒字基調が続いている。

また主な貿易国との収支関係をみると，輸入超過となっているのはアメリカだけであって，大部分の国々との貿易は出超となっていて，特にラクタ，ＥＣ，ソ連への出超が多い。

農　産　物　の　輸　出　価　額

年次	１９７７年	１９７８年	１９７９年	７９年の構成比
総輸出価額	5,652	6,400	7,809	100.0％
（農業生産物）				
農産物	2,071	2,200	2,776	35.6
畜産物	621	798	1,154	14.8
動植物油	370	391	540	6.9
加工食品，飼料，たばこ	857	845	1,014	13.0
皮革及加工品	307	433	670	8.6
木材及加工品	1	1	1	0.0
小計	4,227	4,668	6,155	78.9
（農業以外生産物）	1,425	1,732	1,654	21.1
輸出に占める農産物比率	74.8％	72.9％	78.8％	－

資料　経済省貿易統計

農産物の輸入価額

（単位：100万ドル）

総輸入価額	4,162	3,834	6,712	100.0%
（農業生産物）				
農産物	301	258	402	6.0*
畜産物	25	30	70	1.0
動植物油	6	6	12	0.2
加工食品，飼料，たばこ	43	53	165	2.4
皮革及加工品	1	1	4	0.1
木材及加工品	53	54	128	1.9
小計	429	402	781	11.6
（農業以外の生産物）	3733	3,432	5,931	88.4
輸入に占める農産物比率	10.3%	10.5%	11.6%	—

*コーヒー，バナナ，ココアを含む。

資料　前掲書

貿易の構造

（単位：万ドル）

項目＼年次	1975	1976	1977	1978	1979
（輸出）					
資本財	29,960	29,640	34,480	37,170	36,930
原料及中間財	196,190	250,130	360,650	402,850	492,330
消費財	69,980	111,840	170,050	199,930	251,930
計	296,130	391,610	565,180	639,950	781,190
（輸入）					
資本財	56,200	50,290	111,090	109,620	150,000
原料及中間財	273,790	193,380	223,820	205,340	348,700
燃料・油脂	51,500	53,080	67,690	97,190	112,500
消費財	13,160	6,550	13,550	21,220	60,000
計	394,650	303,300	416,150	433,370	671,200
貿易収支	△98,520	88,310	149,030	206,580	109,990

資料　前掲書

主な貿易先とその収支

（単位：100万ドル）

項目＼国別	ラプタ	E C	アメリカ	スペイン	日本	ソ連	その他の国	計
1977年								
輸出	1,372	1,774	383	281	308	211	1,324	5,653
輸入	984	1,094	772	111	364	20	819	4,164
収支	388	680	△389	170	△ 56	191	505	1,489
1978年								
輸出	1,513	2,146	537	331	381	385	1,107	6,400
輸入	832	1,192	704	124	267	11	1,204	4,334
収支	681	954	△167	207	114	374	△ 97	2,066
1979年								
輸出	1,852	2,522	569	420	396	415	1,636	7,810
輸入	1,326	1,819	1,409	292	356	31	1,467	6,700
収支	526	703	△840	128	40	384	169	1,110

資料　前掲書

2. 穀物の輸出

(1)小麦の輸出

アルゼンチンの輸出農産物で最も多いのは小麦である。小麦の輸出数量は，1979年に429万5,000トンであり，その価額は6億0,469万ドルであった。1977年には564万トンの輸出があったが1977年には163万トンに激減した。年により豊凶格差があり，国内消費向け数量が固定することから輸出向数量は豊凶差だけ増減する。

1979年の小麦1トン当たり価格は141ドルである。

アルゼンチンの輸出数量は世界の輸出総量8,300万トンに比べると5.1％に過ぎない。それでも世界第5位の輸出国である。

世界で小麦輸入量を1979でみるとソ連は1,100万トンでこれに次いで中国800万トン，日本の580万トンなどが多い。

アルゼンチンが1980年に輸出した国は24か国で，その総輸出数量は，548万トンである。

輸出先国で最も輸出数量の多いのはソ連で231万トンで，これに次いでブラジル85万トン，中国67万トン，ボリビア21万トン，ペルー16万トンなどでその他の国々に128万トンを輸出している。ソ連への輸出割合は42.2％，ブラジル15.6％，中国が12.1％でこ

アルゼンチンの小麦輸出先国別数量

輸出先国	小麦輸出数量 (1,000トン)	割合 (%)
ソ連	2312	42.2
ブラジル	853	15.6
中国	665	12.1
ボリビア	209	3.8
ペルー	162	3.0
T・N・G	133	2.4
イラン	88	1.6
イタリア	66	1.2
ラフタ	48	0.9
その他	945	17.2
計	5,481	100.0

資料　ラフタ統計資料

アルゼンチンの小麦輸出量とその価額

年次	輸出数量 (1,000トン)	輸出価額 (US$1,000ドル)	平均価格の推移 (1トン当りドル)
1975年	1,778	300,699	169
76	3,143	431,491	137
77	5,638	541,374	96
78	1,627	173,940	107
79	4,295	604,694	141
80	4,481	−	−

資料　前掲書

小麦の世界貿易（1979年）

国別	輸出数量 (万トン)	構成比 (%)	国別	輸入数量 (万トン)	構成比 (%)
アメリカ	3,600	43.4	アフリカ	1,290	15.5
オーストラリア	1,550	18.7	ソ連	1,100	13.3
カナダ	1,500	18.1	中国	800	9.6
EC諸国	1,000	12.0	南米諸国	750	9.0
アルゼンチン	423	5.1	日本	580	7.0
ソ連	50	0.6	東ヨーロッパ	550	6.6
その他	177	2.1	EC諸国	420	5.1
			その他	2,810	33.9
計	8,300	100.0	計	8,300	100.0

資料　FAO統計

の3国で70%を占めている。

(2) とうもろこしの輸出

とうもろこしの生産数量は，1978年に970万トンであったが，1979年に870万トン，1980年に640万トンと年々減少した。そのため80年の輸出数量も352万5,000トンに激減した。しかもこの年の輸出先国はソ連が296万トンと84.1%を買い付けたため，イタリア34万トンで9.6%，キューバが10万トンで2.9%，オランダへ7万トンで2.1%を輸出したほかその他国への輸出は4万5,000トンであった。

とうもろこしの輸出先国別数量（1980年）

国別	輸出数量 (1,000トン)	割合 (%)
ソ連	2,965	84.1
イタリア	340	9.6
キューバ	101	2.9
オランダ	74	2.1
その他	45	1.3
計	3,525	100.0

資料 フンタ我計資料

(3) 大豆の輸出

1980年の大豆の生産は350万トンであるが，輸出数量は271万トンで，輸出割合は77.4%である。

世界の大豆輸出数量は2,826万トンであり，そのうち，2,313万トンがアメリカで81.8%を占めているため，これに次いでアルゼンチンの輸出が第2位を占めているが，そのシアーは9.6%に過ぎない。

世界の大豆輸入国はEC諸国が1,238万トンで43.8%を占め，日本が445万トンで15.8%，スペイン246万トンで8.7%で，その他の国が897万トンで31.7%を占めているが，一国では日本が最大輸入国である。

アルゼンチンでは大豆のまま輸出する数量のほかに大豆油として加工して輸出しているが，その輸出数量は1979年に8万トンであり，主な輸出先はブラジル，パキスタン，ベネズエラ，チリー，ボリビア，オランダ，などである。

大豆輸出先国別数量（１９８０年）

国別	輸出数量（1,000トン）	割合（%）
ソ連	747	27.6
オランダ	584	21.5
スペイン	359	13.3
イタリア	313	11.6
ブラジル	247	9.1
ルーマニア	184	6.8
その他	275	10.1
計	2,709	100.0

資料　フンタ統計資料

世界の大豆輸入国

国別	輸入数量（1,000トン）	割合（%）
ＥＣ諸国	12,377	43.8
日本	4,450	15.8
スペイン	2,464	8.7
その他の国	8,969	31.7
計	28,260	100.0

資料　FAO統計による。

大豆油の輸出

国別	輸出数量（トン）	割合（%）
ブラジル	32,430	40.1
パキスタン	11,242	13.9
ベネズエラ	10,999	13.6
チリー	7,234	9.0
ボリビア	3,598	4.5
オランダ	2,019	2.5
その他の国	13,264	16.4
計	80,786	100.0

資料　農牧省統計表

(4)　落花生の輸出

この国の落花生は1,979年に４７万トンの生産をあげたが，８０年には２１万トンに激減したため輸出数量も減少した。１９８０年の輸出数量は僅かに７万トンとなった。輸出先はオランダへ４万4,000トン（６２９%）アンゴラへ１万トン（14.3%），日本には5,000トン（7.1%）が輸出されている。

(5)　ソルゴーの輸出

ソルゴーの生産は１９７８年に７２０万トンで１９７９年６２０万トンに減少し，さらに１９８０年には２９６万トンに激減した。そのために輸出数量も減少し僅かに１５２万トンとなった。そのうち97.5%に及ぶ１４８万トンをソ連が買付けたので，キューバとイタリア

に若干でつ輸出したに過ぎない。

1979年の輸出数量は，390万トの輸出があったのでこの年は，その60.7%に及ぶ237万トンが日本に輸出されていた。

落花生輸出先国別数量
（1980年）

国別	輸出数量（1,000トン）	割合（%）
オランダ	44	62.9
アンゴラ	10	14.3
日本	5	7.1
その他	11	15.7
計	70	100.0

資料　農牧省統計

ソルゴーの輸出数量

国別	輸出数量（1,000トン）	割合（%）
ソ連	1,478	97.5
キューバ	12	0.8
イタリア	11	0.7
その他	15	1.0
計	1,516	100.0

資料　フンタ統計

アルゼンチンでソルゴーの生産が続いていた，1977年から1979年まで3か年間は，日本はそれぞれ，213万トン，209万トン，237万トンと引続き200万トンを上回る数量を輸入してきたが，1980年には輸入することができなかった。

世界のソルゴー貿易は凡そ1,215万トンの輸出入があり，輸出国はアメリカ，アルゼンチン，オーストラリアの3国で93.9%を占めていた。この期間の輸入国は日本，メキシコスペインの3国が67.5%を占めている。1980年に生産の激減した年にソ連が大量の買付けを行なった。この事情を検討すると世界には需要国の多いことがわかる。

ソルゴーの国際貿易

輸出国（1,000トン）			輸入国（1,000トン）		
国別	1979年7月 1980年6月	割合（%）	国別	1979年7月 1980年6月	割合（%）
アメリカ	8,600	70.8	日本	5,000	41.2
アルゼンチン	2175	17.9	メキシコ	2200	18.1
オーストラリア	630	5.2	スペイン	1,000	8.2
その他	745	6.1	その他	3,950	32.5
計	12150	100.0	計	12150	100.0

資料　FAO統計

(6) その他の穀物の輸出

穀類で輸出されるものは上記のほかに，ビール用大麦，からす麦，ライ麦，コウリャン米，亜麻，くさよし，などが輸出されている。その輸出数量は１９７９年に，凡そ４０万トン，１９８０年には３０万トンにのぼる。これらの穀物についても海外市場の需要とこの国の生産動向を研究する必要があろう。

これらの穀類の総輸出数量について，輸入先国をみると，輸出先は55カ国であるが，最も多いのがソ連であって，７５８万トンに及び，その割合は５２５％を占めている。これに次いで，オランダ，156万トン，ブラジル，116万トン，イタリア，97万トン，中国，66万トン，西ドイツ，４３万トン，スペイン，３９万トン，デンマーク，３１万トン，キューバ，２１万トン，ボリビヤ２１万トン，などが多く，これらの１０カ国で，９３４％を占めている。

アルゼンチンの穀物輸出先国別数量（１９８０年）

国別	輸出数量（1,000トン）	割合（％）	国別	輸出数量（1,000トン）	割合（％）
ソ連	7,578	52.5	デンマーク	311	2.1
オランダ	1,558	10.8	キューバ	213	1.5
ブラジル	1,164	8.1	ボリビヤ	209	1.4
イタリア	968	6.7	ペルー	162	1.1
中国	665	4.6	フランス	141	1.0
西ドイツ	429	3.0	その他の国	647	4.5
スペイン	387	2.7	計	14,432	100.0

資料　フンタ統計資料

(7) 穀物の輸出港

アルゼンチンの穀物の輸出港は１４港が指定されており，これらの港には穀物公社（JUNTA）の事務所があり，穀物公社が輸出する穀類の受付，検査，積込み，荷役の一切を担当して管理しているが，荷扱量の最も多いのは，ロザリオ港で，５４２万トンを荷積みする。これに次いで，ベエノス，アイレス港の２６２万トン，バイヤブランカ港の，２２８万トン，コンスティション港の１４５万トンでその他の港は１００万トン未満である。

アルゼンチンの穀類輸出港別荷扱量（1980年）

輸出港	積込数量（1,000トン）	割合（%）	輸出港	積込数量（1,000トン）	割合（%）
ロザリオ	5,424	37.6	サン・ペドロ	302	2.1
ブエノス・アイレス	2,622	18.2	デル・ウルガイ	56	0.4
バイヤ・ブランカ	2,280	15.8	デイヤマンテ	47	0.3
コンスティトウシオン	1,453	10.1	マル・デル・プラタ	20	0.1
クブューエン	684	4.7	バラン・クロンス	2	0.0
サン・ロケンソ	681	4.7	ラマリオ	1	−
サン・ニコラス	477	3.3			
サンタ・フェ	383	2.7	計	14,432	100.0

資料　フシタ統計資料

3. 綿とマテ茶

(1) 綿の輸出

この国では綿の産地に適しているが，その生産はきわめて少ない。それでも年々輸出が続けられており，日本への輸出も続けられている。

(2) マテ茶の輸出

マテ茶の生産は南米特有のものであるが，この国では4万ヘクタールに栽培されており輸出農産物として，安定している。その輸出先国は，チリー，アメリカ，イギリス，オランダ，カナダなどである。

綿せんいの輸出先国

（単位：1,000トン）

国別	1977	1978	1979
日本	24	55	19
台湾	5	22	10
中国	2	27	5
ベルギー	3	7	4
タイ	1	2	2
西ドイツ	2	7	2
スペイン	1	2	2
オランダ	0.5	2	1
その他	26	23	17
計	64	147	62

資料　経済省貿易統計

マテ茶の輸出先国別数量（1979年）

国別	輸出数量（トン）	割合（%）
チリー	9,695	32.7
アメリカ	7,493	25.3
イギリス	5,349	18.1
オランダ	2,748	9.3
カナダ	748	2.5
その他	3,591	12.1
計	29,624	100.0

4. 野菜と果実の輸出

(1) ポロット豆の輸出

ポロット豆は1980年に17万8,000トンの生産があるが，1979年の統計では17万6,000トンが輸出されており輸出価額は7万4,200ドルとなっている。しかもその輸出先国は，ヨーロッパ諸国が多い。

野菜とし取扱われている品目ではポロット豆以外の品目の輸出資料がない。

(2) 果実の輸出

アルゼンチンは果実の産地であるが，その輸出統計の詳細は不明である。

出数量をみると，りんごの輸出が最も多く，主として南米諸国向けと考えられる。りんごの輸出数量は，31万7,000トンで，その輸出価額は，14万4,000ドルである。

オレンジは1万3,000トンが輸出されており，価額は4,000ドルとなっている。

みかん（マンダリン）は4万1,000トンが輸出されており，価額は，1万5,000ドルである。グレープフルーツが，1万3,000トンの輸出で，その価額は5,000ドル，梨が6万7,000トンの輸出で，3万5,000ドルの価額となっている。果実総量では，45万1,000トンが輸出され外貨を20万3,000ドル獲得したことになっている。

この国の果実の輸出はりんごが主体であり，これに次いで梨とみかんの輸出が多い。

ポロット豆の輸出先国（1979年）

国別	輸出数量（1,000トン）	輸出価額（1,000ドル）
イタリア	26	11.0
イラク	26	11.0
オランダ	22	9.3
アルゼリア	13	5.5
アンゴラ	14	5.9
フランス	12	5.1
キューバ	8	3.4
ベネズエラ	7	3.0
ブラジル	7	3.0
イスラエル	7	3.0
その他	34	14.0
計	176	74.2

果実の輸出（1979年）

種別	輸出数量（1,000トン）	輸出価額（1,000ドル）
りんご	317	144
オレンジ	13	4
みかん（マンダリン）	41	15
グレープフルーツ	13	5
梨	67	35
計	451	203

資料：農牧省統計表

5. 食肉の輸出

(1) 牛肉の輸出

1979年にアルゼンチンから輸出された牛肉の数量は，43万8,741トンであった。その輸出価額は，9億8,800万ドルである。1トン当たりの価額は2,231ドルとなる。

牛肉の輸出数量に加工食肉を含めた数量は69万7,000トンであって，その価額は，14億1,700万ドルであった。ところが1980年の輸出は減少し，牛肉だけでみると，27万3,530トンに激減した。

平均1トン当たり価格が2,827ドルに上昇したにかかわらず，その輸出価額は，7億7,300万ドルに減少した。

1,980年の輸出先国別の輸出数量をみると，ソ連の8万7,762トンで，これに次いで，アメリカの3万3,953トン，イギリスの3万3,096トン，西ドイツの2万0,314トン，ギリシャ1万1,927トン，イスラエル1万1,348トン，イタリア，9,660トン，エジプト，7,327トン，オランダ，7,069トン，チリ6,234トン，フランス5,295トン，ブラジル，4,182トン，サウジアラビア，3,745トン，スペイン，3,183トン，香港，2,265トン，その他の国が2万6,174トンである。したがって，ソ連，アメリカ，イギリス，西ドイツの4か国で64%を占めている。

世界の牛肉主要生産国の合計は1,978年3,492万トン，79年3,321万トン，80年には3,255万トンと若干減少ぎみであるが，このうちの主要生産国が主要輸入国でもある。

牛肉の輸出先国別数量

国名	輸出数量 トン	割合 (%)	国名	輸出数量 トン	割合 (%)
ソ連	87,762	32.1	チリ	6,234	2.3
アメリカ	33,953	12.4	フランス	5,295	1.9
イギリス	33,096	12.1	ブラジル	4,182	1.5
西ドイツ	20,314	7.4	サウジアラビア	3,745	1.4
ギリシャ	11,927	4.4	スペイン	3,183	1.2
イスラエル	11,348	4.1	香港	2,265	0.8
イタリア	9,660	3.5	その他	26,174	9.6
エジプト	7,327	2.7			
オランダ	7,065	2.6	計	273,530	100.0

資料　フンタ食肉統計

世界の牛肉主要生産国

（万トン）

国別	1978年	1979年	1980年
アメリカ	1,116	983	963
EC諸国	638	679	690
ソ連	662	650	630
アルゼンチン	320	308	295
オーストラリヤ	214	176	151
ブラジル	214	200	195
メキシコ	106	104	105
カナダ	115	103	100
ニュージランド	33	48	45
日本	40	42	43
ウルグアイ	34	28	38
計	3,492	3,321	3,255

資料　FAO統計

1978年のFAOの統計から主要輸出国と輸入国の交流表を作成して，どの国がどこの国から輸出するかをみると，アメリカは，各国から輸入しており，日本はオーストラリアからの輸入が主体である。ブラジルは，アルゼンチンとウルグアイから輸入しており，イギリス，ソ連，カナダは各国から輸入しているが，西ドイツはアルゼンチンとウルグアイから輸入している。その他の国々はアルゼンチンに集中して輸入しており，アルゼンチンの輸出先国の多いことがわかる。

牛肉貿易交流表（１９７８年）

（単位：１００トン）

輸入国＼輸出国	オーストラリヤ	アルゼンチン	ニュージーランド	ウルグアイ	計
アメリカ	3,940	445	1,608	15	6,008
日本	977	－	22	1	1,000
ブラジル	－	650	－	345	995
イギリス	108	422	48	3	581
ソ連	173	327	38	－	538
カナダ	237	26	243	1	507
西ドイツ	8	348	1	38	395
韓国	401	－	－	－	401
エジプト	42	309	－	36	387
イスラエル	85	264	－	34	383
ギリシヤ	1	278	－	31	310
イタリヤ	3	174	－	10	187
オランダ	－	141	－	17	158
その他	1,113	1,003	282	99	2497
計	7,088	4,387	2242	630	14,347

資料　ＦＡＯ統計より作成

(2)　羊肉の輸出

羊類（山羊を含む）の１９８０年のと殺頭数は６９５万頭で，輸出向けと殺は，１１４万頭で，凡そ16.4％であるが，生肉で輸出された数量は１万1,000トンで，その価額は２万3,300ドルであるが，１９７９年には，２万3,000トンで，価額は４万2,600ドルであったから，８０年は半減している。

(3)　牛皮と羊及び山羊皮の輸出

１９８０年の牛皮は1,500万枚であるが，そのうち1,400万枚が輸出される。その価額は，４億1,800万ドルである。

また羊及び山羊の皮は同じく，１９８０年に８４０万枚が生産されて，その内約半分の４３０万枚が輸出され，その価額は４億6,100万ドルである。国内で加工された皮製品は皮とは別に１億3,610万ドルの輸出が行なわれており，畜産関連品の輸出が多くなっている。

(4)　蜂密の輸出

肉類ではないが農家の副業として行なわれている養蜂が行なわれており，その蜂密は西ドイツ，日本，イギリス，アメリカなどに輸出されているが，その数量は２万3,600トン

といわれており，その輸出額は2,190万ドルにのぼっている。

（国内市場）

1. アルゼンチンの消費人口

1980年11月に調査したアルゼンチンの人口は，2,786万2,771人であって，10年前の2,336万4,431人に比べて，449万8,340人の増加であり，19.3%の増加率である。

この10年間に首都ブエノス・アイレスだけが，6万4,452人も減少しており，その他の州は一様に増加している。

都市人口を消費人口と考えてみると，人口10万人以上の都市は35市であるが，工業化が進んでいないためか人口の都市集中化は顕著ではない。人口がこの10か年に30%以上増加した都市はコンフレンシア（73.2%），フフイ（54%），サンフェルナンド（46%），サルタ（45.5%），フォモーサ（45%），ラアスエラス（42%），ミシオネス（40.5%），ゼネラルローカ（40%），サンチャゴデルエステロ（37%），サンニコラス（36.9%），コリエンテス（35.1%），ゼネラルクエードン（33.6%），などの12都市であるが，いずれも地方都市である。

人口の都市集中として認められるのは，大ブエノスと呼ばれている首都周辺部の増加数142万1,775人（26.4%）であろう。この大ブエノスを除く人口30万人以上の都市は，コルトバ（99万人），ロザリオ（94万人），ラプラタ（47万人），ゼネラルクエリードン（42万人）ツクマン（39万人），ラキヤピタル（37万人）の6都市に過ぎないが，これらの諸都市を消費都市としてその需要を開発することが必要である。

アルゼンチンの州別人口

州　名	世帯数	男	女	計	1970年の人口	10年間の増加率(%)
アルゼンチン	8,306,705	13,716,098	14,146673	27,862771	23364,431	193
ブエノスアイレス*	1,092558	1,324,499	1,583,502	2908,001	2972,453	22
大ブエノスアイレス**	3,451896	5,351,970	5,444,066	10,796,036	8,774,529	230
カタマルカ	52455	101,519	104,685	206,204	172323	197
コルトバ	699,798	1,188,495	1,218,640	2407,135	2060,065	168
コリエンテス	161,586	325,424	332292	657,716	564,147	166
チャコ	161,260	350,244	342166	692,410	566,613	222
チュブ	73,717	136,335	125,861	262,196	189,920	381
エントレリオス	242,622	445,871	456,370	902241	811,691	112
フォルモーサ	69,320	148,219	144,260	292,479	234,075	250
フフイ	103,161	204,374	204,140	408,514	302,436	351
ラ・パンパ	67,575	106,805	100,327	207,132	172029	204
ラ・リオハ	40,636	81,141	82201	163,342	136237	199
メンドーサ	306,279	584,761	602,544	1,187,305	973,075	220
ミシオネス	139,705	293,110	286,469	579,579	443,020	308
ネウケン	61,473	124,386	117,518	241,904	154,570	565
リオ・ネグロ	109,981	196,820	187,076	383,896	262,622	462
サルタ	154,351	330,140	332229	662,369	509,803	299
サンファン	108,310	226,780	243,193	469,973	384,284	223
サンルイズ	57,376	106,869	105,968	212,837	183,460	160
サンタクルス	31,236	64,302	50,177	114,479	84,457	355
サンタ・フェ	754,653	1,207,963	1,249,225	2457,188	2135,583	151
サンチャゴ・デル・エステロ	137,349	317,384	334,934	652,318	495,419	317
ジクマン	221,761	480,803	487,263	968,066	765,962	264
	7,547	17,884	11,567	29,451	15,658	881

* 首都

** 首都を除く

資料　アルゼンチン統計局

人口10万人以上の都市

都市名	1980年11月		1970年11月	過去10年間
	世帯数	人口	人口	の人口増加率
首都(ブエノスアイレス市)	1,092558	2908,001	2972453	−22%
大ブエノスアイレス(首都周辺都市)	2001,686	6,802222	5,380,447	26.4
小計	3,094,244	9,710,223	8,352900	16.3
(ブエノスアイレス州)				
バイア・ブランカ	73,303	233,126	191,624	21.7
ゼネラル・クエリードン	210,648	423,989	317,444	33.6
ラプラタ	153,070	473,233	408,300	15.9
サンニコラス	31,703	113,509	82925	36.9
(コルトバ州)				
コルトバ	256,364	990,007	798,663	24.0
リオカルト	57,637	190,704	168,689	13.1
サンシュスト	48,532	159,506	146,749	8.7
(コリエンテス州)				
コリエンテス	48,281	186,130	137,823	35.1
(チャコ州)				
サンフエルナンド	54,639	228,696	156,475	46.2
(チュブ州)				
エスカラント	26,974	101,016	78,479	28.7
(エントレリオス州)				
セソコルデバ	31,274	122477	94,509	29.2
パウナ	58,907	223,665	189,537	18.0
(フオルモーサ州)				
フオモーサ	24,284	102241	70,534	45.0
(フフイ州)				
フフイ	38,798	166,867	108,378	54.0
(メンドーザ州)				
メンドーザ	35,237	118,427	118,568	−0.1
ゴディクルーサ	35,330	141,553	112,481	25.9
グエイマレーン	43,311	179,020	138,479	29.3
ラプスエラス	26,898	119,844	84,489	41.9
サン・ラファエル	45,978	143,190	131,239	9.1

人口１０万人以上の都市（つづき）

都市名	１９８０年１１月		1970年11月	過去１０年間
	世帯数	人口	人口	の人口増加率
（ミシオネス州）				
ミソオネス	36,249	146,241	104,091	40.5
（ネウケン州）				
コンフレシシア	42,129	155,731	89,938	73.2
（リオネグロ州）				
ゼネラル，ロカ	55,967	201,329	143,798	40.0
（サルタ州）				
サルタ	58,847	265,632	182535	45.5
（サンフアン州）				
サンフアン	30,010	117,731	112500	4.6
（サンタ・フェ州）				
ロザリオ	295,557	935,471	798,292	17.2
ラ・キャピタル	108,116	374,834	312427	20.0
ゼネラルロペズ	51,503	152347	136,071	12.0
カステレエノス	37,533	122271	107,807	13.4
ゼネラル・オビリガド	28,057	114,049	102476	11.3
サンロレンソ	32,692	110,425	88,625	24.6
（サンチャゴ，デル・エステロ）				
サンチャゴ，デル・エステロ	37,775	163,228	119,127	37.0
（ツクマン州）				
サンミクエルデツクマン	88,703	392,888	－	－
クルーザルタ	24,024	111,657	－	－

2. 穀類等の国内消費と価格

(1) 穀類等の国内消費

この国の人口が2786万人であり，この人口は消費者である。この人口が消費する食料は確保する必要がある。過去において，輸出の増進が国内需要を考慮しなかったこともあって，穀物公社はこれを調整する任務もあるようである。

穀物等の国内消費をみると，小麦44.7%，大麦87.3%，ライ麦75.7%，からす麦87.5%，とうもろこし44.9%ソルゴー48.8%，コウリャン67%，米はほとんど100%を国内で消費する。

大豆の国内消費は226%で，落花生は66%，ヒマワリ63%，亜麻933%，マテ茶804%などである。このほか，綿，たばこ，ブドウ，砂糖きびなどはすべて，国内で加工される原料となる。

穀類の国内消費を増進させる道はなさそうである。それは，この国の主要産業である肉牛放牧が自然牧草でその大部分を充足させているためであるが，統計上明かでないが，アルファルファー，アルピステ，飼料穀物の国内畜産への需要が諸外国程度になると，穀類の国内消費が大きく変革するであろう。しかし現状ではその見込はなさそうである。

穀類等の国内消費量（１９８０年）

（単位：1,000トン）

	生産数量	輸出数量	国内消費量	国内消費割合
小麦	8,100	4,481	3,619	44.7%
大麦	339	43	296	87.3
ライ麦	202	49	153	75.7
からす麦	522	65	457	87.5
とうもろこし	6,400	3,525	2875	44.9
ソルゴー	2960	1,516	1,444	48.8
コウリャン	188	62	126	67.0
米	312	1	311	99.9
大豆	3,500	2709	791	22.6
落花生	206	70	136	66.0
ヒマワリ	1,650	226	1,424	63.0
亜麻	743	50	693	93.3
マテ茶	153	30	133	80.4
たばこ	62	－	加工	
綿	160	－	加工	
ブドウ	3,000	－	加工	
砂糖きび	15,000	－	加工	

資料　農牧省統計より作成

(2) 穀類の国内価格

① 小麦の国内価格

小麦の国内価格は穀物公社（TUNTA）が最低支持価格をきめており，生産者が不当に安い価格で買収されたときは生産者の申出により穀物公社が介入して改訂させることができる。したがって小麦は不当に買い叩かれることはなく，国際相場に連動するが，この国のインフレの昂進がきわめてはげしいことから価格の変動がはげしい。富農は自家サイロを有し，平均売りで有利に販売するが，中小農家は青田売りや出来秋売りが多いため，結果的には，きわめて低い価格で買い取られることになっている。

小麦の国内価格の動向
（1俵当たりペソ）

年月	実際価格	年間価格変動指数	1960年を1とする実質価格倍率	実質価格指数
1979年 8月	19,543	100.0	247	100.0
9月	21,255	108.8	254	102.8
10月	23,580	120.7	272	110.1
11月	24,305	124.4	271	109.7
12月	24,183	123.7	260	115.3
1980年 1月	26,736	136.8	276	111.7
2月	27,990	143.2	276	111.7
3月	28,781	147.3	271	109.7
4月	29,070	148.7	264	106.9
5月	31,819	162.8	277	112.1
6月	32,916	168.4	269	108.9
7月	36,643	187.5	290	117.4

（79年12月最低保証価格24,300ペソ）

資料 ブエノスアイレス穀物取引所

② ビール用大麦の国内価格

この国で栽培される大麦はビール麦であり，その大部分は国内で麦芽としてビールの醸造に使用されるが，その価格変動ははげしい。

1979年8月を100とする指数でみると1980年7月の指数は185.2となっており，凡そ小麦価格と同じ動きを示している。

ビール用大麦の国内市場価格（１俵当たり）

年月	実際価格（ペソ）		1960年＝1とする倍率	
	価格	年間価格変動指数	実質価格倍率	年間価格変動指数
1979年8月	13,632	100.0	1.72	100.0
9	14,000	102.7	1.67	97.1
10	14,000	102.7	1.61	93.6
11	14,114	103.5	1.57	91.3
12	17,139	125.7	1.85	107.6
1980年1月	18,736	137.4	1.93	1122
2	20,995	154.0	207	120.3
3	21,800	159.9	205	119.2
4	22350	164.0	203	118.0
5	23,571	172.9	205	119.2
6	24,000	176.1	1.96	113.9
7	25,250	185.2	200	116.3

資料　プエノス，アイレス穀物取引所資料より作成

③　ライ麦の国内価格

ライ麦は輸出数量が少なく国内消費が主体であるが，その価格変動は大麦より小巾である。1979年8月を100とする指数でみると1980年7月には151.1となっている。

これを1960年価格を基準とする実質価格でみると変動ははげしいが，1980年7月の価格は大きく下落した計算になっている。

④　からす麦の国内価格

からす麦は工業用原料に用いられることから，その価格は上昇傾向にある。実際価格でみると，1979年8月では100kg当たり1万3,191ペソであったが，1980年の7月では3万0341ペソとなり，指数は230となっている。これを実質価格指数でみても143.7となっており，上昇基調である。

⑤　コウリャンの国内価格

コウリャンも国内消費が多いことからその価格変動もはげしく，実際価格でみると，1979年8月に，1俵当たり，1万6,468ペソであったが，1年後の80年7月の価格は3万7,173ペソと上昇し，その指数は225.7となった。この上昇はきわめて強いようである。

ライ麦の価格（１００kg当たり）（キンタール）

年月	実際価格（ペソ）	年間価格変動指数	1960年＝1 実質価格倍率	年間変動指数
１９７９年　８月	15,705	100.0	1.98	100.0
9	17,580	111.9	2.10	106.1
１０	17,700	112.7	2.04	103.0
１１	17,623	112.2	1.96	99.0
１２	20,583	131.1	2.24	113.1
１９８０年　１	22,568	143.7	2.33	117.7
2	26,233	167.0	2.58	130.3
3	26,981	171.7	2.54	128.3
4	27,375	174.3	2.49	125.8
5	25,976	165.4	2.26	114.1
6	25,000	159.2	2.04	103.0
7	23,818	151.7	1.38	69.7

資料　前掲書

からす麦工業原料用価格（１００kg当たり）

年月	実際価格（ペソ）	年間価格変動指数	１９６０＝１ 実質価格倍率	実質価格変動指数
１９７９年　８月	13,191	100.0	1.67	100.0
9	13,620	103.6	1.64	98.2
１０	14,470	109.7	1.67	100.0
１１	14,400	109.2	1.60	95.8
１２	14,400	109.2	1.55	92.8
１９８０年　１	16,832	127.6	1.74	104.2
2	21,100	159.9	2.08	124.6
3	23,809	180.5	2.24	134.1
4	24,000	181.9	2.18	130.5
5	24,619	186.6	2.14	128.1
6	26,895	203.9	2.20	131.7
7	30,341	230.0	2.40	143.7

資料　前掲書

コウリャン国内価格（実際価格）
（キンタル1俵100kg）

年月	実際価格(ペソ)	年間変動指数	年月	実際価格(ペソ)	年間変動指数
79年 8月	16,468	100.0	80年 2年	24,195	146.9
9	17,535	106.5	3	24,581	149.3
10	17,196	104.4	4	24,345	147.8
11	17,397	105.6	5	26,033	158.1
12	19,594	119.0	6	29,205	177.3
80年 1月	20,267	123.1	7	37,173	225.7

資料　前掲書

⑥　大豆の国内価格

大豆はその大部分が輸出されるが国内で製油用として加工される価格は他の穀物に比べて変動がない。これは国際価格や製品価格の動きとの関連もあるが，大豆油の価格の停滞にもよるものと思われる。

1979年8月の100kg当たりの価格は3万2500ペソであり，1年後の80年7月の価格は4万900ペソであるから25.5%の上昇となるが，これを実質価格でみるとその指数が78.8となっており，大きく下落したことになる。

大豆油の価格は実際価格で弱保合であり，実質価格指数では63.5を示しているので，大巾な下落である。

大豆油粕は高価な副産物であるが，この国では1トン当たり28万4,000ペソだから，34万6,000ペソに昂騰していて，その指数は121.8を示しているが，実質的には下落のようである。この国の畜産が飼料需要の少ないためであろう。

⑦　ヒマワリの国内価格

ヒマワリは輸出もあるが，国内消費用の製油として利用されている。その国内価格はあまり好調とはいえない。業界では不況であるといわれている。ヒマワリ1俵の価格は，10万ペソで年間の価格変動は弱保合であった。

ヒマワリは国際商品といわれており，国際価格が低迷していることもあるが，国際価格はややもち直しつつあるもののごとくである。

⑧　亜麻の国内価格

亜麻種の価格も油の価格が低迷していることと関連してあまり好況とはいえない。インフレ下の実際価格で強保合では実質的には低下である。1俵100kg当たりの価格は1979年8月4万2,000ペソで1年後の80年7月の価格は4万7,000ペソであるから不況というべきであろう。

大豆の国内価格

年月	100kg当実際価格1,000ペソ	年内変動指数	実質価格の倍率*	実質価格の変動指数
1979年 8月	32.6	100.0	41.1	100.0
9	31.8	97.5	37.9	92.2
0	32.3	99.1	37.1	90.3
1	31.9	97.9	35.5	86.4
2	31.5	96.6	33.9	82.5
1980年 1月	31.3	96.0	32.3	78.6
2	35.7	109.5	35.2	85.6
3	33.4	102.5	31.6	76.9
4	31.6	96.9	33.6	81.8
5	33.5	102.8	29.2	71.0
6	35.5	108.9	29.0	70.6
7	40.9	125.5	32.4	78.8

*実質価格1960＝1とする倍率

資料 前掲書

大豆油の国内価格

年月	100kg当実際価格1,000ペソ	年間変動指数	実質価格の倍率*	実質価格の変動指数
1979年 8月	108.5	100.0	13.7	100.0
9	114.5	105.5	13.7	100.0
10	113.2	104.3	13.1	95.6
11	108.5	100.0	12.1	88.3
12	110.0	101.4	11.8	86.1
9180年 1月	105.8	97.5	10.9	79.6
2	105.0	96.8	10.4	75.9
3	95.9	88.4	9.0	65.7
4	89.7	82.7	8.1	59.1
5	90.1	83.0	7.8	56.9
6	87.6	80.7	7.2	52.6
7	109.7	101.1	8.7	63.5

*実質価格1960＝1とする倍率

資料 前掲書

大豆油粕ペレット国内価格

年月	実際価格1トン当(1,000ペソ)	年間変動指数
1979年 8月	284	100.0
9	278	97.9
10	329	115.8
11	300	105.6
12	318	112.0
1980年 1月	335	118.0
2	340	119.7
3	333	117.3
4	253	89.1
5	290	102.1
6	310	109.2
7	346	121.8

資料　前掲書

ヒマワリの国内価格

年月	ひまわり1俵当実際価格(1,000ペソ)	ひまわり圏産物ペレット(粉)(トン当1,000ペソ)	価格指数 ひまわり(1979/8=100)	圏産物ペレット(1979/8=100)
1979年 8月	100	195	100.0	100.0
9	105	197	105.0	101.0
10	87	206	87.0	105.6
11	95	214	95.0	109.7
12	96	229	96.0	117.4
1980年 1月	102	234	102.0	120.0
2	110	253	110.0	129.7
3	98	215	98.0	110.3
4	90	196	90.0	100.5
5	96	206	96.0	105.6
6	94	194	94.0	99.5
7	118	220	118.0	112.8

資料　前掲書

亜麻の国内価格

年月	亜麻1俵100kg当（1,000ペソ）	亜麻油100kg当（1,000ペソ）
1979年 8月	42	80
9	44	83
10	41	79
11	40	82
12	42	86
1980年 1月	40	90
2	42	98
3	43	112
4	41	104
5	42	108
6	43	111
7	47	115

3. 青果物の国内市場

(1) 青果物の国内消費

この国では野菜の生産流通に関する統計がないが，卸売市場では古くからきわめて多数の野菜類が流通している。したがって野菜について，統計数字で説明することはできないが，全国の諸都市で卸売されている野菜はきわめて大量である。

果実の統計も不正確である。その生産も正確には把握されていないが，生産数量の統計と輸出数量の統計から計算した国内消費数量は，りんご64万トンで生産の66.9%，が消費されていることになる。このように考えると，梨は凡そ10万トンで凡そ59.4%が国内消費である。オレンジ69万トン（98.1%），マンダリン26万トン（86.2%），グレープフルーツ14万トン（91.5%）が国内で消費されている。このほか輸出されていない果実ではレモン39万トン，桃24万トン，バナナ14万トンなどのほか，すもも，栗，くるみなどの果実も流通しているから果実類の市場取扱数量はきわめて多量にのぼるであろう。いいかえると，消費需要があるということである。

果実の国内消費（１９８０年）

（単位：1,000トン）

	生産数量	輸出数量	国内消費数量	国内消費割合
りんご	958	317	641	66.9 (%)
梨	165	67	98	59.4
オレンジ	700	13	687	98.1
マンダリン(みかん)	296	41	255	86.2
グレープフルーツ	153	13	140	91.5
レモン	394	−	394	100.0
桃	238	−	238	100.0
バナナ	140	−	140	100.0
計	3,044	451	2593	85.2

資料　農牧省統計

(2)　青果物卸売市場

①　ブエノスアイレスの卸売市場

ブエノスアイレス市には１１の卸売市場がある。このうち荷扱量の最も多いのは市営のドレーゴー市場（卸売人５５０人）で，これに次々民営のアバスト市場（卸売人３００人であるが，このほか９か所の卸売市場があるが，市の周辺都市を含めた，所謂大ブエノス都市圏内に１４か所の卸売市場があり，大量の取引を行なっている。

政府はこれらの卸売市場を合併する考えで１９６７年に卸売市場公団法を制定して，市の郊外に５２０ヘクタールの敷地を確保し，１９７１年から建築に着手し建物は完成している。この法律でブエノスアイレス市の中心から半径５０キロメートルの円内では卸売市場行為を禁止するものであり，現在この圏内で営業している卸売市場はすべて吸収する計画である。この市場の設計はフランスのランジェス卸売市場の設計を参考にして建設されたといわれているが，その設備は完璧であるといっても過言ではない。

ところが，従来から営業している卸売市場側ではこの新市場に入場することに反対している。また政府の側でも，この新市場の運営を国営とするか，市営とするか，また公団の経営とするかの基本事項を決定していないので，広大な新市場は建物が管理されているだけである。

しかし，現行の卸売市場には問題があり，あまりにも多くの卸売人が営業しており，青果物の流通過程が複雑で中間利潤が多く消費者価格を高上しており，消費者からの批判もはげしい。そのため，卸売市場の改善が必要なことはいうまでもない。

新設卸売市場の構想は，アルゼンチンの人口2786万人のうち，大ブエノス圏の人口が，９７１万人であり，国の人口の凡そ，３５％が集中していることを想定して建設した

もので，表門には２１カ所の入口を設け，裏門には１０カ所の入口が設けられている。

入門時間で入荷する種類別数量を申告計量される仕組みである。この市場は青果物と水産物を取扱うための設備を設けており，鉄道の引込線やプラットホームを完成している。この国の鉄道が広軌の線と狭軌の線があるが両者を合理的に導入している。

入荷する貨物や，貨物自動車の置場も広大で，買受人の自動車置場も広大な置場が用意されている。

場内は６種の大卸売場のほか生産者直売所を設け充分な設備である。

建物の地下は労務者の更衣室が設備されており，ここには洗面所，シャワーの施設があり，各棟ごとに食堂と付属商の店舗用建物が準備されている。

② ロザリオの卸売市場

ロザリオ市は大ブエノスに次ぐ第２の大都市であり，その人口は９４万人であるが，サンタ・フェ州の州都でもあり，近郊の市町を含めた人口を対象に市場が形成されている。

ここは，この国唯一の工業都市であり，鉄鋼業の都市として古くから栄えていたが，近年鉄鋼工業の不振で失業者が多くなり，現状では活気を失なったかにみえる。

この市には青果物の卸売市場が２か所ある。その１つを『メルカードフィッシャートン』と呼び，他の１つを『メルカードデブットクトール』と呼ぶ。この両者は共に広大な市場敷地に広い舎屋を建設しており，卸売業務は盛況を呈している。

メルカードフィッシャートンは，卸売業者の経営である。即ち民営として古くから運営されてきた。卸売人は６０社程度であり，建物の両側に店舗を設けて，生産農家からの委託販売と，直接買付品の卸売りを行なっている。卸売人も比較的大きく場内は整然としており，販売は早朝６時頃に開場し，買受人は市内と近郊の小売人である。この市には公設小売市場はなく，個人商店として青果物商が仕入れにきて，すべて相対取引であり，その代金の決済サイドは７日程度で信用取引となっているようである。

またメルカードデブットクトールの方は，その経営が生産者組合であり，生産農家優先の経営である。フィシャートンと同じ程度の大きな舎屋であるが，中央部は生産者直売所であり，生産者農家はここで自由に販売することができる。この市場は生産者の販売を主体として発展してきた市場であるが，現在は両側壁面に卸売人の店舗が設けられており，盛大に営業が行なわれている。

ロザリオ市場の取扱品目は，ブエノスアイレスの卸売市場と変りがないが，同市の周辺が野菜産地であることから品数が豊富であり，近郊町村で日本の野菜が生産されており，この市場で販売されている。

③ バイヤブランカの卸売市場

バイヤブランカは昔から貿易港として有名である。人口は２３万余に過ぎないが，穀

物輸出港として栄えており，人の出入りが多く空港もあり南部の大都市といわれている。

この都市には２つの卸売市場がある。その１つが「メルカードアバスト」と呼ばれ，午前８時頃から営業を開始している。

この市場は卸売業者の経営であり，卸売業者の使用する売場面積の広さに応じて，市場使用料を徴収して運営されている。

この卸売市場で営業する卸売人は２８人であるが，生産者農家が売場を借用して一定期間自分の生産した品目の販売を終ると出店を終ることから，この卸売市場を使用する卸売人は延１２０人である。

青果物の入荷時刻は午后８時頃から翌朝午前４時頃迄続き，卸売（販売）開始は午前８時で12時頃迄で一応の卸売業務は終了する，買受人は市内と近郊の町々の小売人である。

卸売業者は生産者の委託を受けて販売するが，産地で買付ける品物もあり，品揃えの関係からブエノス・アイレスの卸売市場から仕入れて販売している。

バイヤブランカの卸売市場は近郊農村で生産される青果物が少なく，品揃えが困難であり，他の市場から転送を受けることが多いといわれている。

他の１つの卸売市場は「協同組合の卸売市場」といわれており，主として生産農家の売場として運営されている。そのため販売開始が午后１時となっている。

この卸売市場の経営の原則が生産者の直売であるが，現状では生産者でない卸売業者が一部の売場を借受けて営業している。

この卸売市場の建物や卸売場の舎屋は広いが，メルカードアバストに比べるとあまり盛況とわいえないようである。これはこの都市の消費人口が少ないためであろう。

(3) 小売市場の現況

ブエノス・アイレス市には古くから小売市場が発達しているが，ブエノス・アイレス市以外の，諸都市では調査がないが，ロザリオとバイヤブランカの両市をみた限りでは，小売市場はないようである。

ブエノス・アイレス市の小売市場は，市営の公設小売市場が６４か所もあり，民営の小売市場が２０か所ある，これを合せると集合店舗方式の小売市場は８４か所になる。

この都市に公設小売市場が多いのは，市内の舗道でリゴン売りや立売りする商人が多くなり，交通整理の必要から市当局が公設小売市場を建築して収容したためであるといわれており，これらの公設小売市場の運営は入場している小売店舗に組合を作らせて自主管理させており，売場の使用料とガス・水道・電気などの共益費を徴収して経営している。したがって現状では修繕費も入場者の負担であり，市当局の財政負担はあまり準備されていないようである。

市の公設小売市場担当部局の調査では，その業種別店舗数は，野菜３３４店，果実３０５店，根物類（玉ねぎ，じゃがいも等），の店が１２７店，肉類３４２店，豚及び鶏肉鶏卵を売る店６０店，食肉加工品を売る店１５０店，チーズを売る専門店３０店，魚類を売る店１４７店，雑貨商２５０店で，計1,７４５店となっているので，公設小売市場１市場当たりの平均店舗数は２７店である。

公設小売店以外で青鮮食料品を売る店は，市当局の調査によると凡そ１万９千店であって，そのうち，青果物商が，１万１千店，肉屋が1,２５０店などである。

この調査はあまり正確ではないかも知れないが小売市場の実態を知るための参考となるであろう。

4. 肉類の国内市場

アルゼンチンの食肉は近年輸出が減少して，その主力が国内消費向けに重点が置かれているようである。１９８０年の統計によると，牛肉の国内消費をと殺時点の頭数でみると，牛肉では国内消費向けが1,２２４万頭で，その国内消費割合は８７.１％であり，羊類は（山羊を含む）５８１万頭でその消費割合は８３.６％である。豚はそのほとんど全部，３０３万頭が国内消費向けであり，馬はそのと殺の全部１９万頭が国内で消費されるようである。

食　肉　の　国　内　消　費

（単位1,000頭）

種別	と殺頭数	輸出頭数	国内消費	国内消費頭数割合
牛	14,052	1,813	12239.	87.1％
羊（山羊を含む）	6,945	1,140	5,805	83.6
豚	3,035	－	3,035	100.0
馬	991	－	191	100.0

資料　食肉フンタ統計より作成

(1) 食肉の市場構造

アルゼンチンには冷凍工場と称する食肉処理場があり，近代設備を有し，部分肉として冷蔵するもので輸出用肉の製造を目標に整備された工場が２７社に及んでいるがこのうち大工場が１２社である。

１９８０年に処理された肉牛は1,４０５万頭であったが，このうち冷凍工場で取扱ったものは６９０万頭であり，地方のと場で消費向けにと殺された頭数は６８４万頭であり，農場のと場でと殺されたものが３０万頭であった。

羊類（山羊を含む）冷凍工場の処理が２０９万頭でその内国内向けが９５万頭，消費向けと場で処理されたものが１２６万頭，農場のと場で処理されたものが３６０万頭である。豚は冷凍場で１８５万頭が処理されたが，これはすべて国内向けであり，消費者向けと場で処理されたものは７９万頭，農場のと場で処理されたものは４０万頭である。

馬はすべて農場のと場で処理されており，その頭数は１９万頭であった。

これを食肉重量で表示すると，牛肉は２８８万トンで，そのうち，４５万トンが輸出され残りの２４３万トンが国内消費に充てられた計算になる。

羊類の肉は１２万トン生産され，そのうち２万トンが輸出され，残りの１０万トンが国内消費となった。

豚は２７万トンが生産され，その総てが国内消費に回されている。

馬は総て農場で処理され凡そ４万トンが市場に出回らずに消費された計算になる。

食肉処理場別取扱い数量

（単位：1,000頭）

	冷凍工場取扱頭数			消費向けと場扱	農場のと場	計
	輸出向	国内向	計			
牛	1,813	5,091	6,904	6,848	300	14,052
羊類	1,140	947	2087	1,258	3,600	6,945
豚	－	1,845	1,845	789	400	3,034
馬	－	－	－	－	191	191

資料　食肉フンタ銭計より作成

食肉の処理と仕向別数量

（単位：1,000トン）

	冷凍工場取扱い分			消費向けと場	農場のと場	計
	輸出向	国内向	計			
牛肉	448	1,056	1,504	1,314	58	2876
羊類肉	19	12	31	22	65	118
豚肉	0	175	175	64	27	266
馬肉	－	－	－	－	43	43
計	467	1,242	1,710	1,400	193	3,303

資料　同上

第4　CORFOで生産される農産物の販売

1. 何が栽培されるか

CORFOの営農計画が確立しないと何が生産されるかがわからないが，アルゼンチンの農産物処理はいままでてきたように，穀物と肉類が輸出指向であり，これらの生産物が生産される場合は国際商品として，国際競争下で価格が形成されて行くであろう。したがってCORFOといえどもその生産は国際市場に即応してその経営採算を考えて対応しなければならない。

塩基の集積の強いところでは綿花の生産が行なわれるであろう。その場合は大規模でないと販売の単位を構成しないであろう。

野菜の生産では国内消費を前提に栽培する必要がある。国内消費は都市別の消費人口が需要の限界である。出荷すべき都市を確定しその卸売市場への時期別の出荷産地とを調整勘案して生産の地域分担を確定することが必要であろう。

さきにみたように，この国では人口の集中している，大ブエノス都市圏と人口30万人以上の都市を対象に必要な野菜等を選択する必要がある。

CORFOは，ブエノス・アイレス市を距てること800キロメートルの地点にある。したがって，この輸送費が市場競争の勘案事項となる。

これがロザリオ市の卸売市場まではさらに50キロメートルを加算して考える必要がある。

パンパ地方の農業と対比した場合気候条件は寒冷であり降雨量が少ないため栽培作物が限定されることとなるが，これらは経営技術で克復すべき事項である。

2. コスト競争に勝たねばならぬ

CORFOで果実が生産されるかも知れないが，この国の建値は大規模生産者の耐えうるコストで決定されている。CORFOの生産者はこのコスト競争にも勝たねばならない。それは経営技術の問題であり，有能な経営指導者が必要である。

パンパ地方では玉ねぎやじゃがいもの生産が大規模生産者で行なわれ，中小農を圧しつぶして生産を続けると聴いたが，農牧省の統計でみる限り，その心配はどこにもない。生産性の向上で充分対応できることとなろう。

3. 新規野菜の導入が必要

アルゼンチンの野菜類が遅れている。この国で野菜というのは豆類とたまねぎ，じゃがいも，かぼちゃ，人参などであり，これにマンジョカが含められている。

しかし，どこの卸売市場でも葉物類の品質は悪くとても商品とは思えない。

ドレーゴー卸売市場の入荷量をみると最も多いのが，「ふだんそう」であった。ロザリオの卸売市場では，サンタ・フェの農家が日本の野菜種子を輸入して栽培した「かぼちゃ」や「白菜」が飛ぶように売れたという。ブエノス・アイレスの卸売市場では「セロリー」が出荷されているが青葉できわめて葉柄が固く，食用に適しないような品質である。アスパラガスもすべてのグリーンのかた物であった。日本の技術で高品質の野菜を作り，各卸売市場に「日本野菜コーナ」を設けて販売することが考えられる。

バイヤブランカの卸売市場では1箱15キログラム入りのオレンジは1,500ペソであったが売れ行きが悪く流通在庫が多いようであった。しかるに同じ15キログラム入りの「トマト」は1箱6,400ペソで品不足で売手市場となっていて，在庫は皆無であった。産地が需要に対応していないためであろう。

卸売市場の調査を進め適応品種を選択して新規野菜を導入することが必要であろう。

4. CORFOにおける作物の選定と販売

(1) 市場に適応した作物の選定

① 消費都市における野菜の時期別価格の分析

野菜の品目別に高価格を形成する時期は供給が少ない時期である。その時期を明確に把握して，はたしてその時期に日本の技術で栽培できるかどうかを研究する必要がある。もし日本の技術で供給可能であればその野菜の集中生産を行なう作型が形成されるであろう。

② アルゼンチンの卸売市場にはどの卸売市場にも，生産者直売コーナがある。この売場の一区画を確保して，品質のよい日本の野菜類(一代交雑の優良種)を展示即売する「日本人コーナ」を設けて特産売場とする。このことにつき，卸売市場で意見をきいたところ，ロザリオのフィシャートンでは，日本種の野菜は高価で早く売れているようである。良品は必ず高価格を形成する。

③ バイヤブランカでは「パタタ」－(さつまいも)が高価格で売れていた。なぜかといえば近辺では作る農家がいないので，わざわざロザリオの卸売市場の卸売人から転送して貰って販売しているという。

用途の関係もあるが，この国の「パタタ」は品質が悪く日本人では食べないであろう。これらは事例に過ぎない。しかし日本人は「さつまいも」作りなら名人であるはずである。この作物で負けることは絶対にないと思う。

④ 種子作物の栽培の可能性

CORFO地域ではアルファルファの種子が採種されており，種子工場で選別が行なわれていて，盛況を呈しているが，大牧場の多いこの国の事情から，アルファルファの採

種のごとき集約的農業は大農場には向かないであろう。中小規模農家の作物として適合するものと考えられる。

野菜の採種は国際的になっている。日本の野菜種子の生産はすべてF1の採種であるが，だんだん生産が困難になっており，国際的な農産物特に野菜と花き類の採種農業を研究する必要がある。

この国では古くから世界でも稀な「巨大かぼちゃ」が全国で栽培されている，それが，野菜として販売されるが，何年のように売れずに農場で腐敗するものが多いといわれている，ところが国際的には瓜類（マスクメロン，すいか，きゅうりなど）の台木用種子が不足している，この国では育種技術が遅れており農業技術の専門家に聴いても，輸出商品とは気付いていないようであった，台木用種子として採種を進めることにより，輸出産業とし発展させることができるであろう。

この地方は近傍に交配の危険性のある同科の植物がないことから採種に適した土地と考えられる。特に花き類の採種は国際的需要に即応しきれない状況にある。ここでは契約栽培と技術習得について研究の必要があろう。

⑤ 欧州向け輸出農産物の研究

ヨーロッパでは冬季野菜が不足しており，ピクルスの如き保存技術を開発し，夏季に栽培して冬季用野菜として供給することを研究すべきであろう。

5. 問 題 点

(1) この国で野菜の不足する時期にこの地域で供給する技術大系が確立できるかどうか，そのための研究を進める必要がある。

(2) 軟弱な野菜を中心とする日本野菜の供給コーナを設けて，その需要を喚起することを考えられるが，品質を保持して供給するためには，輸送距離の遠い市場が多く，重点市場である。ブエノス・アイレス市場までの800キロメートルを荷傷みなしに，輸送するための，荷造包装，荷姿の研究が必要であり，輸送コストの低下方法について研究しなければならない。